

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

○全員で 11 名

○内訳：がん専門医 1 人、医師（地域医療）1 人、大学教授 1 名、大学准教授 1 人、がん経験者 1 人、校長 1 人、県福祉保健部局 1 人、教育委員会 4 人

2. 開催時期、検討内容

○がんの教育推進協議会の設置（年 2 回開催）

○第 1 回推進協議会

期日：令和 2 年 9 月 14 日（月） 内容：がん教育の推進に向けた検討

○第 2 回推進協議会

期日：令和 3 年 2 月 1 日（月） 内容：がん教育に関する計画の検証及び今後の取組に対する協議

② 教育委員会としての取組

○教職員、外部講師の研修

がん教育の授業づくりのポイントをまとめたパワーポイントによる動画研修資料を作成し、各学校で教職員のがん教育に対する理解を深める研修等に活用できるようにした。

○外部講師による映像教材の作成

学校が授業の中で活用できる外部講師（がん経験者）によるメッセージ動画映像を作成した。

○授業指定校の教材や取組等を教職員が活用できる体制づくり

小学校 3 校、中学校 3 校の授業指定校が実践した学習指導案等を、県内公立学校（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）、市町村教育委員会に周知した。

上記の 3 つ内容を収録した「がん教育授業活用資料（CD-ROM）」を作成し、県内公立学校に配付することで、県内におけるがん教育の推進及び県内の特徴である離島や山間地域等の条件により、外部講師の活用が困難な学校においても活用できるメッセージ映像等の教材を充実させた。

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

○授業指定校への外部講師の派遣にあたり、県福祉保健部局や授業指定校がある市町村保健部局、または、がん患者の会と連携することで、各学校の実情及び授業内容等に応じた外部講師の派遣につなげることができた。

(2) モデル校における取組

【上越市立有田小学校】

- ・テーマ等：「がんについて学ぼう！」
- ・6年、特別活動「学級活動」、2時間
- ・外部講師：がん経験者（小学校教諭）
- ・2時間続きで授業を行い、始めに外部講師から、がんに関する知識やがん患者として経験、がん患者の家族の思いなどの講話を聞いた。その後、がん患者の接し方などについて、グループワークで意見を出し合い、がんに対する理解を深め、最後に、20年後の自分の行動に対するメッセージを記入した。
- ・児童ががんについて理解を深めやすくするために、外部講師に外部の小学校教諭（がん経験者）を起用し、がん患者の気持ちだけでなく、がん患者の家族の気持ちやメッセージを入れる工夫をした。

【上越市立安塚中学校】

- ・テーマ等：「今私にできること　そして未来へ　～がんについて正しい知識を身につけ、健康で明るい未来のためにできることを考えよう～」
- ・1年、保健体育科（保健分野）、単元名「健康な生活と疾病の予防」、2時間
- ・がんの予防を中心に授業を構成し、1時間目は、「がんという病気」「日本のがんの現状」「がんの発生と進行」「がんの原因」について学んだ。2時間目は、「がんの予防法」について学び、予防するためのオリジナル生活習慣及びがんの危険性を減らすための家族へのアドバイスを考え、グループで共有・発表した。
- ・授業の最後に、がん検診の多くは40歳以上を対象としていることを確認し、27年後（40歳）の自分に対するメッセージを記入した。

【十日町市立下条小学校】

- ・テーマ等：「がんの正しい知識を学ぼう！」「大切な友だちのために自分ができることを考えよう」
- ・6年、体育科（保健領域）、単元名「病気の予防」、1時間
6年、道徳、1時間
- ・県教育委員会が作成した「がん教育の手引き」における小学校の指導例を活用し、授業を行った。
- ・1時間目は、がんについての正しい理解を目的として、がんの仕組みや原因等について、映像教材やワークシートを活用して学び、がんや生活習慣病を予防するための望ましい生活習慣について考え、グループワークで意見交換し、考えを共有した。
- ・2時間目は、がんと向き合う友達に関する教材を活用し、友達が「がん」と知った時の気持ちについて考え、グループワークで意見を共有し、がん患者に対する共感的理解を深めることを通して、自他の命の大切さについて学んだ。

【十日町市立下条中学校】

- ・テーマ等：学び合いやかかわり合いを通して、生徒が主体的に学ぶ授業づくり～頑張らせる授業から、頑張りたい授業を目指して～
- ・3年、保健体育科（保健分野）、単元名「健康な生活と疾病の予防」、1時間
全校生徒、講演会（がん経験者）、1時間
- ・外部講師：がん経験者
- ・1時間目は、がんに対する基礎知識や、がん患者の手記を通して、がん患者の思いを理解した。
- ・2時間目は、小規模校の利点を活かして、全校生徒で外部講師（がん経験者）の講話を聞き、がんに対する理解を深めた。外部講師は、学校の同地域に在住の方を起用したことで、学校や地域の実情を踏まえた講演とすることができた。

【聖籠町立亀代小学校】

- ・テーマ等：「病気の予防～がんについて学ぼう～」
- ・6年、体育科（保健領域）、単元名「病気の予防」、1時間
6年、講演会、1時間
- ・外部講師：がん経験者（フリーアナウンサー）
- ・1時間目は、担任と養護教諭で授業を行い、担任が全体を進行し、養護教諭ががんに対する知識について説明する方式で行った。
- ・児童1人1台のタブレットを活用し、がんに対するクイズやがんについてのデータを通して、児童の興味を引き出しながら、日本のがんの現状やがんの予防法、がん検診の大切さ等、がんに対する知識を学んだ。また、授業の最後に、外部講師のメッセージ映像を視聴し、がん検診の重要性と命の大切さについて考えた。
- ・2時間目は、前時の最後にメッセージ映像で登場した外部講師による講演を行った。メッセージ映像で語られた内容を含め、がんを経験した内容を聞き、がんに対する理解及び命の大切さについて学んだ。
- ・県内のテレビ番組に出演するフリーアナウンサーを起用することで、講演を聞く中でがんについて学ぶだけでなく、児童がテレビを視聴し、外部講師の出演を見た際に、がん教育について思い出すこと、また、児童が自宅で外部講師の出演から、家族に授業で学んだことを伝え、家族でがんについて話す機会を持つことを通して、がん教育の効果を高めることを狙った。

【聖籠町立聖籠中学校】

- ・テーマ等：「がんについて正しい知識を身につけ、将来の自分のために今からできることを考えよう」
- ・3年、保健体育科（保健分野）、単元名「健康な生活と疾病の予防」、1時間
- ・クイズを通して、がんのしくみ、日本のがんの現状、がんの原因等について学び、がんの予防法について、ワークシートを活用し、自分自身の生活習慣についてチェックしながら、現在の生活習慣の振り返りと課題発見について学習した。また、現在の生活習慣の課題を、将来の望ましい生活習慣につなげる改善策について、グループワークを通して意見交換をしながら共有し、生活習慣の改善方法について理解を深めた。

(3) その他

- ・特になし

2. 事業の達成度について

○授業指定校における取組については、学習指導要領でがん教育が位置づけられ、がん教育を実践する上での課題や指導法を検討する中での授業実践であり、授業指定校の担当教員が授業構成等に不安等がある中での取組であったが、児童生徒及び教職員が、がんについての正しい知識やがん患者に対する理解を深めることにつながる授業実践とすることができた。また、授業を受けた児童生徒は、外部講師による講演やがんについて学ぶことを通して、現在の自分の生活習慣と将来の健康について考え、がん患者の思いを理解し、自分や家族の健康や命の大切さについて考えることができた。

【授業前後の児童生徒のアンケート結果より】（※「正しい」または「そう思う」と回答した数値）

- ・がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ。 86.6%→95.3%
- ・早期発見すれば、がんは治りやすい。 86.9%→96.8%
- ・日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う。 66.8%→79.2%
- ・がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。 62.1%→79.0%
- ・がんになっても生活の質を高めることができる。 19.2%→41.8%
- ・がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい。 81.8%→91.9%
- ・がんについて、まずは身近な家族から語ろうと思う。 53.1%→69.3%

○教職員、外部講師の研修について、当初は集合形式による県内3か所での研修会を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染防止の観点から、集合形式の研修会を変更し、教職員向けのパワーポイントを用いた「がん教育の授業づくりのポイントをまとめた動画研修資料」を作成し、全県の公立学校へ配付し周知した。直接、教職員への研修を実施できなかったが、CD-ROMによるデータを配付することで、がん教育の現状やがん教育の授業づくりのポイント等を、特定の教職員が参加する集合研修とは異なり、各学校の状況に応じて視聴できること、また、繰り返し活用できる利点があるなど、研修方法の多様化と内容の充実につなげることができた。

3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

○がん教育の実践に向けた教職員の指導力向上

これまで教職員に対する研修会の開催及び動画研修資料の配付により、教職員の指導力の向上を図ってきた。今後の課題としては、学習指導要領に対応した各学校における授業実践に向け、がんについての正しい理解及びがん患者に対する正しい認識を深める教育をより一層推進する必要があることから、これまでの取組や授業ポイント、外部講師の活用方法等を伝達し、各学校の取組に活かすことのできる研修会を開催していく必要がある。

○外部講師の活用体制の整備

これまでの授業指定校の授業実践から、がん経験者等の外部講師を活用することが、がんに対する理解を深める上で有効であると考えられることから、各学校が、地域の実情に応じて外部講師を活用できるよう体制を整備することが課題である。そのために、外部講師の依頼先リストの作成及び外部講師の依頼が困難な地域等にも活用できるメッセージ映像等の映像資料を充実させることが必要である。

○発達段階に応じたがん教育における指導の充実

本県のこれまでの授業指定校の取組は、小・中学校の実践が中心であり、高等学校のがん教育実践が、小・中学校と比較して不足していることが課題である。学習指導要領の改訂に伴い、令和4年度からの高等学校でのがん教育実施を踏まえ、小学校から高等学校までの系統的な学びを推進していくために、高等学校における実践事例を充実させ、小学校・中学校・高等学校のすべての校種での学習指導教材を整備・拡充していく必要がある。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

○教職員に対するがん教育に対する意識啓発と留意事項の周知

各学校におけるがん教育の授業実践に向け、指導にあたる教職員に対して、がん教育を指導する上で留意事項等を周知することが必要である。日本におけるがんのり患者数等の現状から、児童生徒及びその家族にがん患者がいる可能性も高いことから、授業を受ける生徒への配慮など、授業を実践する際の留意事項等を周知していく。

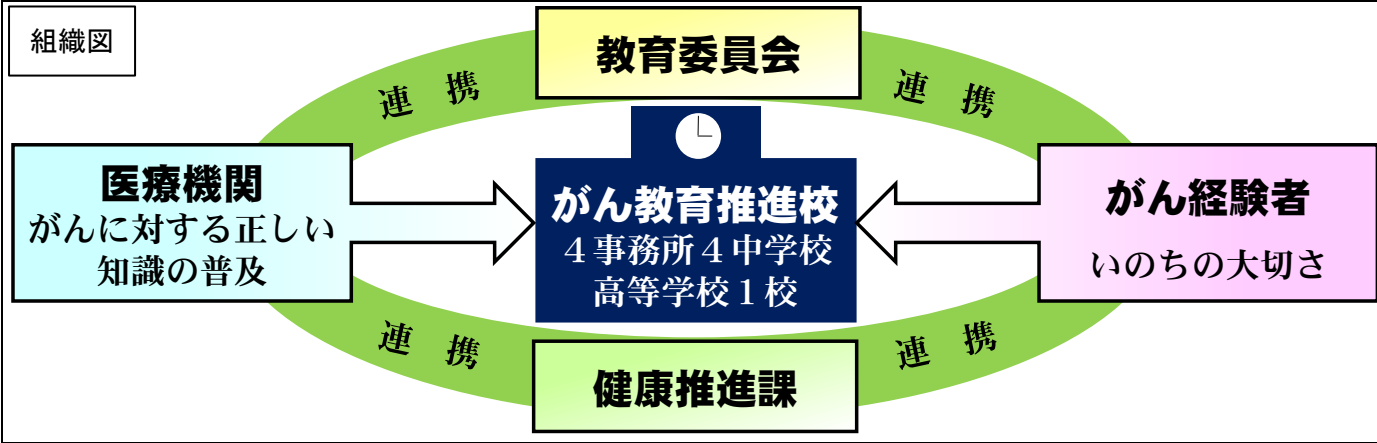
○外部講師の活用方法の周知及び外部講師に対するがん教育の周知

これまでの本県における取組から、がんに対する理解を深めるためには、外部講師を活用することが有効であると考えられることから、外部講師の活用効果及び活用方法を各学校に周知することが必要である。また、外部講師を依頼するがん専門医やがん経験者等に対して、がん教育の現状や指導への協力を周知することが必要である。

1. 事業の具体的内容について

- (1) 自治体における取組
① 協議会について
(ア) 推進委員 (計21名)

所 属	職 名	氏 名
公立松任石川病院	外科部長	石井 要
萌の会	代 表	和田真由美
金沢医科大学病院	がん看護専門看護師	我妻 孝則
はなうめ	ピアサポーター	富士登寧子
石川県済生会金沢病院	副 院 長	龍澤 泰彦
石川県立野々市明倫高等学校	教 諭	岡村 武志
	養護教諭	谷内 広美
能美市立辰口中学校	教 諭	麻田 淳也
	養護教諭	小蔵 陽子
津幡町立津幡中学校	教 諭	船登 尚典
	養護教諭	橋口 昌美
中能登町立中能登中学校	教 諭	湯上 慎也
	養護教諭	石島 由香
珠洲市立三崎中学校	教 諭	林 鉄平
	養護教諭	山寄 真葵
石川県健康福祉部健康推進課	課 長	相川 広一
	主 幹	西田 千穂
石川県教育委員会事務局保健体育課	課 長	村戸 徹
	課長補佐	奥原 真弥
	主任指導主事	藤本 有香
	指導主事	村本圭志朗



- (イ) 開催時期、検討内容
- 第1回連絡協議会 (紙面開催) 7月
 - ・事業趣旨の共通理解及びがん教育の推進に向けた計画の確認、日程調整等
 - 推進協議会 (於：各推進校) 9～11月
 - ・がんの教育に関する保健教育等の指導案作成
 - ・研究授業の日程及び概要について打合せ
 - ※学校の実情や生徒の実態等に合わせ指導案検討の実施
 - ※推進校と講師によるメール等を活用した打合せ
 - 「がん教育講習会」 (紙面開催：スマートスクールネットへの掲載による資料配布) 2月
 - ・がん教育の推進に向けた行政説明・推進校の実践報告
 - 第2回連絡協議会 (紙面開催) 2月
 - ・推進校からの実践報告及び県教委で取りまとめた報告等の実施
 - ・次年度の取組や外部講師リスト等の検討

② 教育委員会としての取組

- ・第1・2回連絡協議会の設定（事業についての説明・年間計画の確認、成果報告と次年度に向けて）
- ・推進校の選定・・・中学校4校、高等学校1校
- ・外部講師の派遣（専門医等2名、看護師1名、がん経験者2名）
- ・指導案の作成
- ・がん教育講習会の開催（紙面開催：スマートスクールネットへ資料を掲載し、周知を図る）
解説「学校におけるがん教育の推進について」
各推進校による実践報告

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

関係機関等との連携により、外部講師を招聘し、学校におけるがん教育の推進を図ることができた。健康福祉部健康推進課との連携により、外部講師の活用体制の整備について検討することができた。

(2) モデル校における取組

① 石川県立野々市明倫高等学校

実施日：令和2年10月27日（火）

会 場：石川県立野々市明倫高等学校

内 容：「がんの予防と回復」（13H教室）

授業者：石川県立野々市明倫高等学校 岡村 武志 教諭

講 師：公立松任石川中央病院 石井 要 外科部長



② 津幡町立津幡中学校

実施日：令和2年11月9日（月）

会 場：津幡町立津幡中学校

内 容：「健康な生活と病気の予防」（3年2組教室）

授業者：津幡町立津幡中学校 船登 尚典 教諭

講 師：金沢医科大学病院 我妻 孝則 がん看護専門看護師



③ 珠洲市立三崎中学校

実施日：令和2年11月13日（金）

会 場：珠洲市立三崎中学校

内 容：「生活習慣病の予防～がんについて～」（3年教室）

授業者：珠洲市立三崎中学校 林 鉄平 教諭

講 師：石川県済生会金沢病院 龍澤 泰彦 副院長



④ 能美市立辰口中学校

実施日：令和2年11月16日（月）

会 場：能美市立辰口中学校

内 容：「がんと健康」（3年1組教室）

授業者：能美市立辰口中学校 麻田 淳也 教諭

講 師：萌の会 和田真由美 代表



⑤ 中能登町立中能登中学校

実施日：令和2年12月10日（木）

会 場：中能登町立中能登中学校

内 容：「がんと健康

～がん患者とともに生きる社会～」（3年1組教室）

授業者：中能登町立中能登中学校 多田 尚悟 教諭

講 師：はなうめ 富士登寧子 ピアサポーター



2. 事業の達成度について

①推進校における生徒アンケートより（対象：中・高校生 280 名）

質問項目等		実施前	→	実施後
1)a	「がんの学習は健康な生活を送るために重要だ」 ※「そう思う」と回答	71.8%	→	92.9%
3)d	「がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う」 ※「そう思う」と回答	56.7%	→	75.2%
⇒ がんを学ぶことに必要感を感じるとともに、がんを自らのこととしてとらえ、今後の健康な生活と関連付けて考えることができたと思われる。				
3)f	「がんになっても生活の質を高めることができる」 ※「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答	55.3%	→	71.3%
3)h	「がんと健康について、身近な家族から語ろうと思う」 ※「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答	80.7%	→	92.9%
⇒ がん患者に対する正しい認識や共生の視点等について理解し、自他の生き方（特に家族等の身近な人たち）について考えを深めることができたと思われる。				

②公開授業研究会参加者アンケートより（対象：管理職 5 名、教諭等 17 名、養護教諭等 5 名、その他 10 名）

	A	B	C	D
研究授業について	91.9%	8.1%		
授業整理会等について	88.6%	11.4%		

A：とても良かった、とても参考になった

B：良かった、参考になった

C：あまり良くなかった、あまり参考にならなかった

D：良くなかった、参考にならなかった

推進校の生徒にとって、がんに関する知識等については、授業者及び外部講師が準備した資料等の活用もあり、事業実施前より確実に定着を図ることができた。また、授業でのグループワークや外部講師との対話を通して、命の大切さや共生の視点等についても理解を深め、自他の生き方等について考えることができたと思われる。

推進校以外の先生方への普及については、今年度、新型コロナウイルス感染症の影響で、がん教育講習会が中止となったため、推進校による実践報告書等をスマートスクールネットに掲載し、広く周知することができた。

3. 今後の課題（今回の事業により新たに見えた課題など）

- 指導内容等の一層の啓発（新学習指導要領に合わせた）
- がん教育実施に向けた配慮事項等に対する具体的な手立て
- 外部講師活用リストの周知や運用方法
- 外部講師の育成

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- ・今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、連絡協議会やがん教育講習会が中止（紙面開催）となり、がん教育を進めるにあたって、困難なことが多かった。そんな中でも、各推進委員の方々と連絡を密に取り、現在の課題や今後に向けて、協議することができた。
- ・各校で、がん教育を進めるにあたって、外部講師リストの周知と無理のない運用方法を検討する必要がある。また、外部講師の無理のない活用の観点からも、地域に根差した外部講師の追加を進めていく必要がある。
- ・新学習指導要領の実施に伴い、今後も継続的に取り組みを進めていくことで、各校の円滑ながん教育の実施につなげていく。

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

ア. 構成員

医師会代表（長野市医師会）、歯科医師会代表（長野県歯科医師会副会長）、薬剤師会代表（長野県薬剤師会副会長）、行政担当者（県健康福祉部保健・疾病対策課長）、がん経験者代表（塩尻市）、PTA代表2人（長野県PTA連合会理事、長野県高等学校PTA連合会副会長）、校長代表2人（中学校長、高等学校長）、教員代表3人（小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭2人）、養護教諭代表（高等学校）、県教育委員会事務局4人（保健厚生課長、保健厚生係長、指導主事、担当指導主事）

* 協議会アドバイザー：信州大学医学部 小泉知展 教授

イ. 開催時期、検討内容

実施時期	実施事項	備考
9月11日	第1回協議会（がん教育の推進に向けた計画の検討） ・パイロット校におけるがん教育の推進について ・がん教育手引き（別冊）作成について 小泉アドバイザーからのアドバイス	出席者 17名
1月28日	第2回協議会（がん教育に関する実践の検証） ・パイロット校の授業及びアンケート調査の結果について ・今後のがん教育推進について 小泉アドバイザーからのアドバイス	出席者 17名

② 教育委員会としての取組

ア. パイロット校の指定、研修会

実施時期	実施事項
10月28日	1 パイロット校 公開授業（小学校・道徳） がん経験者のお話から自分の健康について考える指導例 【参加人数 15名】（小学校教諭1名、養護教諭2名、がん経験者（外部講師）2名、職員10名）
11月2日	2 パイロット校 公開授業（中学校・保健体育 保健分野） 地域の保健師、管理栄養士と連携してがんの予防等を考える指導例 【参加人数 17名】（校長2名、養護教諭4名、外部講師1名、推進委員会1名、職員10名）
11月6日	3 パイロット校 公開授業（高等学校・保健体育 科目保健） 外部講師の話やアドバイスから、がん患者への寄り添い方等を考える指導例 【参加人数 19名】（校長1名、教頭1名、高校教諭1名、養護教諭6名、衛生主管部局1名、外部講師1名、がん教育推進委員1名、その他1名、職員5名、報道関係1名）
11月25日	4 パイロット校 公開授業（高等学校・保健体育 科目保健） 外部講師の講義のもとに、がんの早期発見、治療やがんに対する保障など社会的な対策の必要性を考える指導例 【参加人数 17名】教職員5名、外部講師2名、推進委員1名、職員5名、報道5名）
11月26日	5 がん教育研修会（全県対象） がん教育の理解を図るため、教職員及び外部講師を対象に研修会を開催した。 【参加人数 36名】（教職員29名、外部講師2名、医療従事者5名）

イ. がん教育手引き別冊の作成

＜構成員＞

アドバイザー 聖心女子大学 植田 誠治 教授、教育事務所主任指導主事（特別活動）、保健厚生課指導主事（栄養教諭、養護教諭、担当主事）3人、衛生主管部局（保健・疾病対策課）

実施時期	実施事項
6月30日	第1回がん教育手引き作成委員会（出席者6名） ・事業の概要、作成計画、手引きの内容、役割分担 ・植田アドバイザーからのアドバイス
9月11日	第2回がん教育手引き作成委員会（出席者5名） ・内容検討（指導編、実践編、資料編） ・植田アドバイザーからのアドバイス
11月26日	第3回がん教育手引き作成委員会（出席者5名） ・校正、データ等確認 ・植田アドバイザーからのアドバイス



長野県のがん教育の手引き（H26年度）の別冊として、外部講師を積極的に活用したがん教育の推進のため作成した手引き（右）。特徴としては、負担なく、学校で実際に使っていたできるようにモデルを示し、外部講師リストも紹介、様式例などを入れた点などである。



（H26 がん教育手引き 県教育委員会）

（R3 がん教育手引き別冊 県教育委員会）

◎がん教育の推進にあたって、外部講師を積極的に活用できるよう、教員用手引きとして「がん教育の手引き別冊（R3.2 県教委）」を発行。「外部講師リスト」には、協力団体として県内がん診療連携拠点病院（12病院）等が掲載されている。全県に配布、県ホームページにもアップしている。

（2）モデル校における取組

①パイロット校公開授業 小学校

◎がん教育のアプローチとして、地域教材を活用した指導例

ア 対象学年 （3学年）教科・領域（道徳A主として自分自身に関すること）

イ 指導形態 学級単位

ウ 外部講師 山極勝三郎博士顕彰会幹事 元小学校教諭 神田 愛子 氏

＜ねらい＞

山極勝三郎先生が人工がんを発生させることに成功し世界中の科学者からその功績を認められたことを知った子どもたちが、外部講師のお話を聞いたり、自分たちの疑問に答えていただいたりして、自分が感じたことについて少人数で意見交換することを通して、自分で決めた目標に向かって粘り強く努力していくことの大切さに気づく。



＜外部講師から山極勝三郎の話を聞く＞

授業の中でがんについて触れている内容

◎人工ガン発生実験 ウサギの耳にコールタールを塗る。

◎こぶとり爺さんの話を例に伝える。

◎山極勝三郎先生の言葉からがん予防を伝える。

- ・きれいな空気を吸うこと
- ・何でも食べること
- ・病気は早く治すこと
- ・体を清潔にすること
- など



＜打ち合わせの様子＞

講師と事前打ち合わせのポイント

- ・がん教育のアプローチとして、がんという病気を前面に出さず、がんについて研究を重ねた勝三郎先生の生き方から学ぶという方向で授業構想をする。
- ・児童の感想をもとに打ち合わせをする。

②パイロット校 公開授業 中学校

中学校 単元名「生活習慣病などの予防（がんの予防）」

ア 対象学年 （2 学年） 教科・領域（保健体育 保健分野）

イ 指導形態 学級単位

ウ 外部講師 保健師、管理栄養士 市役所 健康づくり課 職員

＜ねらい＞

外部講師からがんに対する正しい知識や予防、検診等について話を聞いたことを基にがん検診を受診しない人に対して、受診しない理由を考え、検診を勧める言葉を言ったり、書いたりすることができる。



学校で目指すがん教育の考え方

がんは、わずかな知識、それに基づく行動で大きく運命を変えることのできる病気

- がんに対する正しい知識を身に付ける。
- 健康な生活習慣、がん予防は日常の中にチャンスがあることを知る。
- 「がん＝死」のイメージの払拭、早期発見（検診）と治療の必要性を知る。
- 「自分らしく生きることの意味」「生き方」を学ぶチャンスととらえる。



講師と事前打ち合わせのポイント

- ・保健学習で何をねらうかを明確にし、盛りだくさんの内容にならないように注意する。
- ・外部講師に期待することを伝える。
（専門知識、地域の現状、健康づくりアドバイス等）
- ・養護教諭は連絡・調整（打ち合わせ司会、資料準備）等、教科担任は、授業内容の検討等役割分担をする。

③パイロット校 公開授業 高等学校

高等学校 単元名「健康を支える環境づくり」

ア 対象学年 （2 学年） 教科・領域（保健体育 科目保健）

イ 指導形態 学級単位

ウ 外部講師 がん専門医、看護師、薬剤師

佐久総合病院佐久医療センター腫瘍内科医師 堂畑 雄一 氏

＜ねらい＞

がん患者の治療中、治療後の「生活の質」を大切にする考えをもち、ディスカッションを通して、健康に関する環境づくりやその人らしく生きるために何が必要か、自分や家族、ケースの対象者の視点に立って考えることができる。



一人一人が健康に関心をもち、ヘルスプロモーションの考え方を生かした健康に関する環境づくりが大切であるというこの単元のねらいについて外部講師の海外での活動経験を交えた話があり、その後、がんが発生する仕組み、がんの予防、検診等のがんの基本的を学んだ上で、ケーススタディ「がん患者と歩む」のグループ活動に入った。外部講師も一緒に入り、アドバイスをを行った。



講師と事前打ち合わせのポイント

- ・生徒の実態、事前アンケートから分かるがんについての認識を外部講師と情報共有する。
- ・授業で考えたことを生活につなげていけるようにしたいという学校のニーズを伝える。
- ・高校生から社会（地域や家族）に伝えられる活動は何か。どんなことができるかを考えてもらいたいという外部講師の思いや考えを聞く。

④パイロット校 公開授業 高等学校

高等学校 単元名「がん和健康」

◎外部講師の講義のもとに、がんの早期発見、治療やがんに対する保障など社会的な対策の必要性を考える指導例

ア 対象学年 (1 学年) 教科・領域 (保健体育 科目保健)

イ 指導形態 学級単位

ウ 外部講師 がん専門医 諏訪赤十字病院 腫瘍内科部長 進士 明宏 氏

<ねらい>

二次予防で、早期発見、治療が必要であることを理解し、外部講師から実際にかかる大まかな治療費などの情報のもとに、実際に自分や家族が、がんにかかったときに何ができるか考え、社会的な対策が必要であることを理解できる。



手術療法の具体として、直腸がんの手術により肛門を失った人が装着する「人口肛門（ストマ）」の疑似体験を行った。生徒の興味・関心がさらに高まり、そこから医療の最新情報やがんについての正しい情報、治療の実際、費用など話につながっていった。疑似体験を通して、もしも自分や家族ががんになったときに、個人の取り組みだけでは限界があり、社会的な対策が必要であることを考える大きなヒントとなっていることが伺えた。



講師と事前打ち合わせのポイント

- ・事前アンケートから分かるがんについての認識を外部講師と情報共有。生徒の質問に、授業で触れる、または直接答えてもらえるようにする。
- ・学校の要望として生徒同士のディスカッションを入れたいということ伝え、外部講師からは学校の要望に合わせて、できるだけ身近な話題、できるだけ本物を、また 実際を見てもらいたいという提案があり、がん患者が使用する用具をつかった疑似体験を入れる。

2. 事業の達成度について

1 小学校低・中学年へのアプローチについて

<推進会議での意見>

- ・がんの内容は、5、6年生から学ぶ。低学年で無理をせず、例えば今回のように道徳を切り口に学ぶことも考える必要がある。
- ・知識だけではなく、今後も命を考えることなど様々なアプローチをしていきたい。
- ・これまで小学校では、中、高校の内容を簡単にしたものが多かったが、違う角度からのアプローチもよい。

- ・パイロット校の実践を3校参観させてもらった。学校によって選出の仕方、授業の組み方で学ばせてもらった。目的やねらいによって、様々な授業展開になる。生徒が深く学んでいる。

◎小学校の取組は、がんを学ぶ入り口としてやさしく、低学年でも学べるような内容を提案していただいた。

児童が日常生活を見直したり、健康を意識した生活につながったりしていくと考える。

◎中学校、高校においては、生徒の学習カード等から外部講師を活用することで理解が深まったり、授業のねらいが達成されたりしていることがわかる。

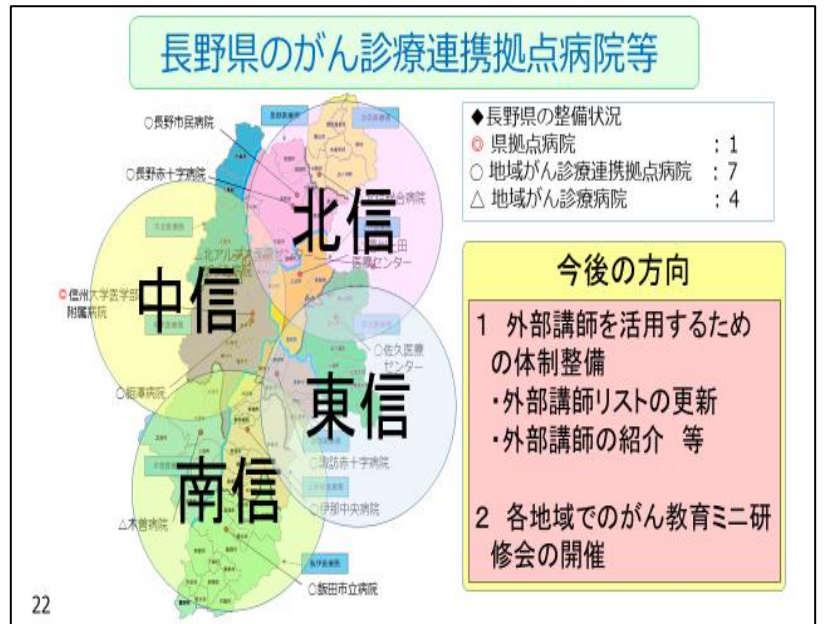
小学校のアンケート結果の一部（事業実施後）

- ・がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ 70.4%
※どちらかといえばそう思うまで含めると 96%
- ・がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う 70.4%
※どちらかといえばそう思うまで含めると 100%
- ・家族や身近な人が健康であってほしいと思う 88.9%

2 外部講師について

<推進会議での意見>

- ・がん診療連携拠点病院における協議会で、外部講師リストについて県教委のホームページに連絡先を掲載する許可をもらった。拠点病院に連絡をとって、医師だけではなく、看護師、保健師、栄養士など、相談をすればアレンジをしてくれることを期待している。
 - ・パイロット校の取組は、母親として大変ありがたい。外部講師が入った授業は子どもたちから話題として出てくる。
- ◎全てのがん診療連携拠点病院が外部講師リストに掲載できたことが大きな成果。今後、研修会等で接点を持ち、ミニ研修会等を利用して情報共有の仕方を考えていきたい。敷居を高くせず、ミニ研修等を利用してがん教育を広げていけるとよい。



3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

<推進会議での意見>

- ・外部講師を経験している病院と経験のない病院がある
 - ・コロナ禍で健康に対する考え方や取組は大きく変化している。このチャンスをはがん教育にどのように結びつけるか考えたい。いかに外部講師を活用するかがポイントになるのではないかと。
 - ・今年度初めてがん教育に関わったが、原因、予防などの知識理解だけではなく、様々なアプローチがあることを知った。がんは今後も私たちの身近な病気になると思うので、これからもがん教育の推進が必要。
 - ・外部講師を増やしていきたい。経験者の立場として仲間を増やしていきたい。外部講師もブラッシュアップが必要。
- ◎コロナ禍で健康に対する考え方や取組は大きく変化しているという指摘のとおり、がん教育においても、他の様々な教育とあわせて、調整が必要であると考えます。また、がん教育の経験においても学校、外部講師によっても差があるので、学校や外部講師が学ぶ機会も増やしていけるように考えていく必要がある。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

長野県は、平成26年度から国委託事業を7年間実施し、がんに対する正しい知識やがん患者に対する理解を深めてきた。教員が行う授業に加えて外部講師の方に医療のことや自身の体験に基づいたお話を聞くことで、子どもたちのがんに対する理解が深まることがこれまでの実践で明らかになっていることから右のように外部講師を活用できる体制を整えてきた。しかし、本県においては外部講師の活用が必ずしも十分とは言えない状況である。

そこで、令和2年度にがん教育を積極的に活用したがん教育を推奨するためがん教育の手引きの別冊を作成し、県下に周知した。今後、県に登録されている医療機関や医療従事者、がん経験者を学校へどのようにつなげていくかが課題としてあげられる。単に外部講師の活用率を上げることが目標ではなく、外部講師がかかわることで、効果的に、かつ健康教育の一環としてがん教育が進められるようになることが大事であると考えている。

令和3年度は国の委託事業ではなく、県単独の事業として動いている。地域で活躍するがん専門医やがん患者・経験者等を地域の学校につなげるため、地域別のミニ研修会の開催を予定。また、昨年度のパイロット校の2校（中学校1、高校1）については、継続して授業公開をする予定。さらに衛生主管部局である保健・疾病対策課主催の「長野県がん対策推進協議会」へ参加し、これらの活動について意見を求め、評価・改善していく。

（令和3年3月現在）

外部講師 リスト更新

○個人登録	31名
※医療従事者	26名
がん経験者	5名
○団体登録	12団体

<令和3年度の主な取組予定>

- ・地域別のミニ研修会の開催
- ・パイロット校の公開
- ・「長野県がん対策推進協議会」への参加

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

全員で14名

内訳：医師会1名（内科医）、がん拠点病院1名（がん専門医）、大学教授2名、
県健康福祉部保健医療課長1名、がん経験者2名、養護教諭2名、
モデル授業校授業者（高等学校保健体育科教諭、中学校保健体育科教諭）2名
県教育委員会体育健康課事務局3名

2. 開催時期、検討内容

■第1回推進協議会 【令和2年10月13日（火）岐阜県総合教育センター】

- 令和元年度の「がん教育」の実施状況について
- 令和2年度の「がん教育」の推進について
- 今後の学校における「がん教育」の推進について
- 令和2年度「外部講師を活用したがん教育モデル校」における取組について
（郡上市立白鳥中学校・岐阜県立加茂高等学校）※中学校1校、高等学校1校

■第2回推進協議会 【令和3年1月26日（火）OKBふれあい会館 ⇒ 書面開催】

- 令和2年度の「がん教育」の実施状況について
 - ・県内の動向について（大垣市・垂井町の取組から）
 - ・「外部講師を活用したがん教育モデル校」の実践の成果と課題について
- 令和3年度の学校における「がん教育」の推進について

② 教育委員会としての取組

■令和2年度 がん教育指導者研修会 【令和2年7月 ⇒ コロナの影響により中止】

- 「がんを正しく理解するための講話」と「外部講師を活用した授業の進め方」について企画したが、
コロナの影響により中止となった。（同内容で令和3年度の指導者研修会で実施することになった。）

■夏休み中学生向け講座「がんと医療」【令和2年7～8月 ⇒ コロナの影響により中止】

■「ママのバレッタ原画展」の周知



夏休み中学生向け講座は中止となったが、岐阜県図書館が、令和2年7月18日（土）～26日（日）に、「ママのバレッタ原画展」を企画し、教育委員会として周知した。

「ママのバレッタ」

大腸がんを経験した岐阜県大垣市出身の方が絵と文を担当した絵本。子どもとがんの話をしてもらいやすくするために絵本をつくろうとキャンサーペアレンツが立ち上げた「えほんプロジェクト」の第一弾となる作品

■モデル校を指定した授業実践（中学校1校、高等学校1校）

○外部講師を活用したがん教育のモデル校として中学校1校、高等学校1校を指定し、授業実践に取り組んだ。コロナ禍でこれまでと同様の進め方が困難であったことや過去の実践の課題を踏まえ、保健体育科教諭（T1）と医師（T2）によるTTでの授業を行った。

・郡上市立白鳥中学校【美濃地区】

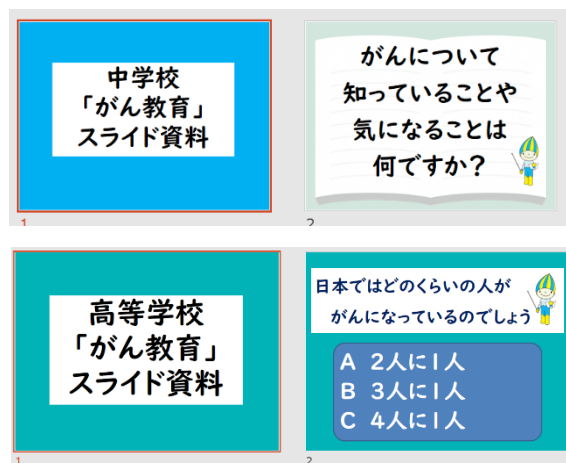
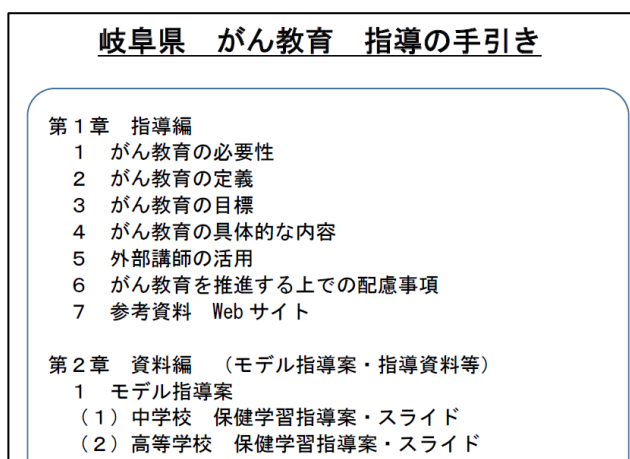
外部講師：JA 岐阜厚生連 中濃厚生病院 緩和ケア医師

・岐阜県立加茂高等学校【可茂地区】

外部講師：県立多治見病院 緩和ケア医師

■がん教育の授業モデル（外部講師を活用した授業例）の周知

○モデル校の授業実践をもとに、外部講師を活用したモデルとなる指導案や授業で使用了資料を、県のホームページに掲載して各学校等への周知、普及を図った。



③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

- ・県健康福祉部保健医療課に依頼して、「学校におけるがん教育推進協議会」の委員に就任していただき、協議会で助言をいただくとともに、がん診療連携拠点病院やがん経験者団体などの外部講師の候補者について紹介をしていただいた。
- ・保健医療課が主催する「岐阜県がん対策推進会議」に参加し、第三次岐阜県がん対策推進計画における「学校におけるがん教育」について関係機関と共通理解を図った。
- ・県内の中学校、高等学校の数に対して、外部講師は十分確保できていないことから、学校医の活用について県医師会に相談をした。

(2) モデル校における取組

【目的】・学習指導要領の改訂により、令和3年度から中学校で、令和4年度から高等学校で「がん」の学習が始まることを受け、外部講師を活用したがん教育の授業について研究実践し、基本となるがん教育のモデル授業案を作成する。そして、県内各中学校、高等学校及び関係者等に配信することで、教職員のがん教育に対する認識を深めるとともに、学校におけるがん教育の推進を図る。

【内容】・中学校1校、高等学校1校をモデル校として指定し、授業実践を通して、外部講師を活用したがん教育のモデル授業案を作成する。

（県内6地区のうち、4地区は平成30年度と令和元年度に実施済みであるため、残りの2地区からモデル校を選出した。）

- ・作成したモデル授業案を保健体育担当教員や養護教諭の研修会等で周知するとともに、HPに掲載し、活用を促す。

■外部講師を活用したがん教育モデル授業 授業研究会①

○令和2年11月26日（木） 郡上市立白鳥中学校 2年A組 （保健体育 1時間）

授業者：T1 保健体育科教諭

T2 中濃厚生病院 緩和ケアセンター長 林 勝知 氏

・【保健】「がんを予防するために、今自分にできることはないか考えよう。」

参加者 （県教育委員会指導主事、教育事務所指導主事等）

<授業の様子>



【教室前方 50インチテレビ2台使用】



【グループ交流 がんの原因は何？】



【医師（T2）の補足説明】



【医師（T2）から生徒へのアドバイス】

<授業の流れ> 教諭（T1）進行

- 1 がんについて知っていることを出してみよう。（発表）
- 2 がんってどんな病気だろう。
- 3 がんになる原因は何だろう。（グループ交流）（発表）
⇒医師（T2）：がんの主な原因についての補足説明
- 4 がんを予防するために自分たちでできることを考えてみよう。（発表）
⇒医師（T2）：生徒の考えた生活改善プランについて評価とアドバイス
- 5 予防していてもかかってしまったらどうするとよいのだろうか。
⇒医師（T2）：治療方法（放射線療法、手術、化学療法、薬など）の説明
早期発見、早期治療のためのがん検診について

<外部講師の活用にあたって>

- ・コロナの感染拡大時期であったため、講師は病院からオンラインでの参加となった。
- ・外部講師の活用方法としては、講話型ではなく、教諭（T1）の説明に対する補足説明や生徒の考えに対する評価やアドバイスを行う T2 として参加していただく TT 授業形式とした。
- ・がんの原因は、生活習慣以外にもあることや、原因がはっきりしていない場合もあること、また、早期発見、早期治療ができれば、多くの場合、治る病気であることを、専門医である医師がおさえることで、生徒が誤った認識をもつことがないようにした。

■外部講師を活用したがん教育モデル授業 授業研究会②

○令和3年12月16日（木） 県立加茂高等学校 1年A組 （保健体育 1時間）

授業者：T1 保健体育科教諭

T2 県立多治見病院 緩和ケア内科部長 伊藤 浩明 氏

・【保健】「がんと向き合い、共に生きていくためには」

参加者 （県教育委員会指導主事、がん教育推進協議会委員等）

<授業の様子>



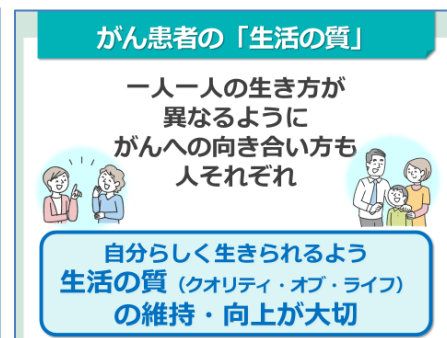
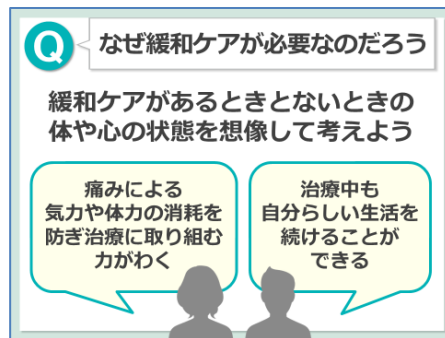
【TT 授業 教諭 (T1) 医師 (T2)】



【スマートフォンを活用した調べ学習】



【医師 (T2) の補足説明】



<授業の流れ> 教諭 (T1) 進行

- 1 日本人はどれぐらいの人ががんにかかるでしょう。
- 2 がんにはどのような治療法があるでしょう。(調べ学習) ※スマートフォンの活用
⇒医師 (T2)：治療方法についての補足説明
- 3 もしあなたがオリンピックの出場を目指す〇〇選手だったら、どの治療方法を選択しますか。(発表)
⇒医師 (T2)：インフォームドコンセントやセカンドオピニオン、緩和ケアについての補足説明
- 4 もしあなたが余命半年と宣告されたら、どうしますか。(発表)
⇒医師 (T2)：生徒の意見に対する価値付けと、担当したがん患者の生き方について伝える。
- 5 自分らしく生きることについて

<外部講師の活用にあたって>

- ・外部講師の活用方法としては、講話型ではなく、教諭 (T1) の説明に対する補足説明や生徒の意見に対する価値付けやアドバイスを行う T2 として参加していただいた。
- ・緩和ケアなど、生徒は初めて耳にする言葉も多いことから、理解できるように補足説明をお願いした。
- ・がんと向き合う発問に対して生徒が自分事として考えられるようにするためにはどうしたらよいか、講師と何度も打ち合わせを行い、「もしあなたがオリンピックに出場する選手だったらどうするか」という問いを入れることで、段階的に考えられるようにした。
- ・もしがんになったらどのように向き合うとよいのか、それは一人一人異なることから、自分らしく生きることの大切さを伝えるために、講師の医師が担当したがん患者の方の生き方を話していただいた。

2. 事業の達成度について

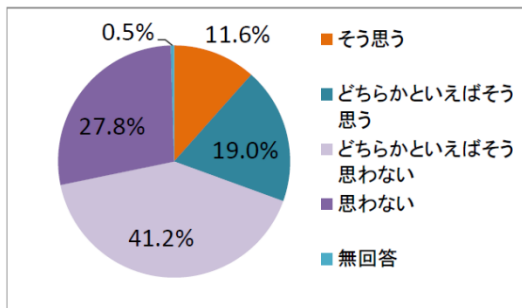
(1) がん教育モデル授業 指定校意識調査 (中学校2年、高等学校1年対象)

モデル校の生徒に対する事業前と事業後の意識の変容は以下のとおりである。

①自分のがんにならないと思う(事業実施前)

(単位:人)

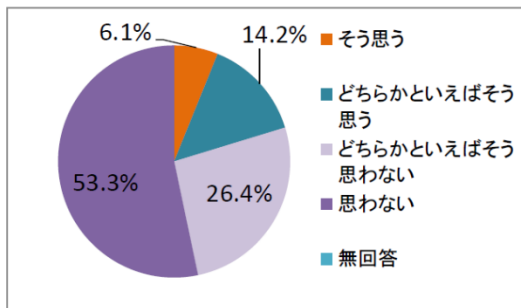
そう思う	25
どちらかといえばそう思う	41
どちらかといえばそう思わない	89
思わない	60
無回答	1



①自分のがんにならないと思う(事業実施後)

(単位:人)

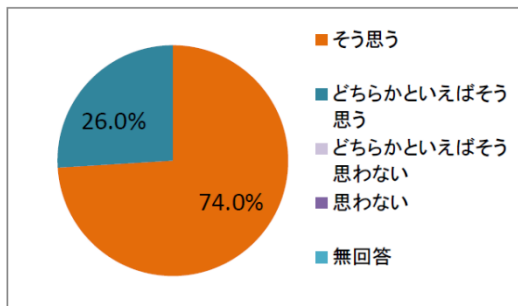
そう思う	13
どちらかといえばそう思う	30
どちらかといえばそう思わない	56
思わない	113
無回答	0



②日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う(事業実施前)

(単位:人)

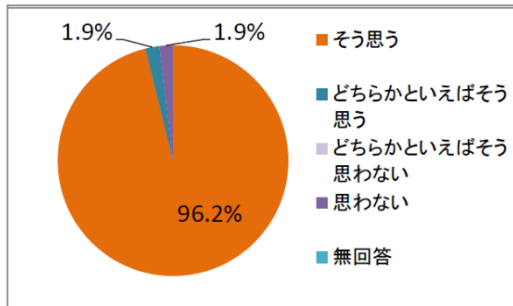
そう思う	77
どちらかといえばそう思う	27
どちらかといえばそう思わない	0
思わない	0
無回答	0



②日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う(事業実施後)

(単位:人)

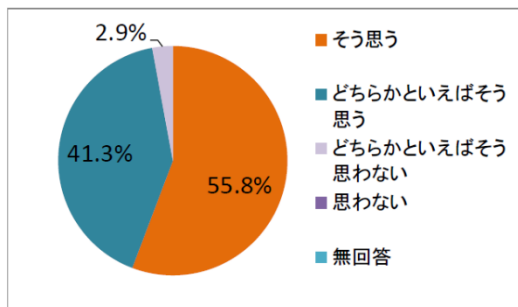
そう思う	100
どちらかといえばそう思う	2
どちらかといえばそう思わない	0
思わない	2
無回答	0



③がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う(事業実施前)

(単位:人)

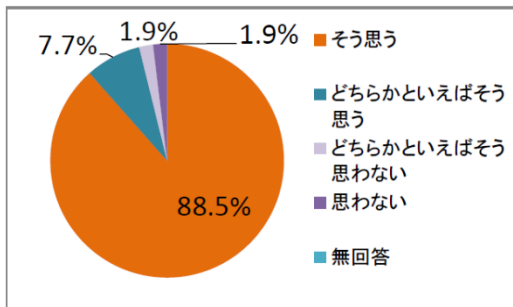
そう思う	58
どちらかといえばそう思う	43
どちらかといえばそう思わない	3
思わない	0
無回答	0



③がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う(事業実施後)

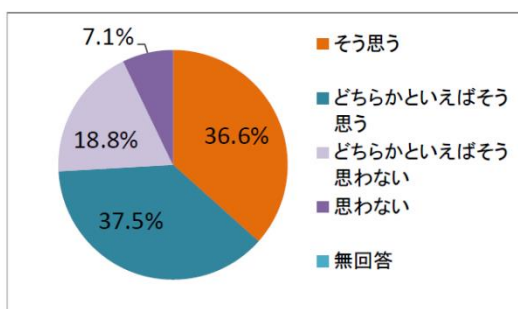
(単位:人)

そう思う	92
どちらかといえばそう思う	8
どちらかといえばそう思わない	2
思わない	2
無回答	0



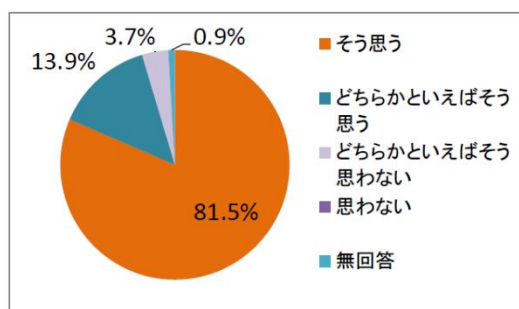
④がんになっても生活の質を高めることができる(事業実施前)

そう思う	41
どちらかといえばそう思う	42
どちらかといえばそう思わない	21
思わない	8
無回答	0



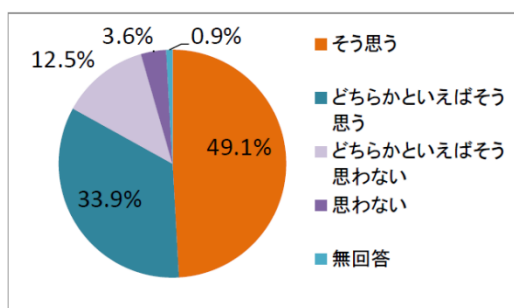
④がんになっても生活の質を高めることができる(事業実施後)

そう思う	88
どちらかといえばそう思う	15
どちらかといえばそう思わない	4
思わない	0
無回答	1



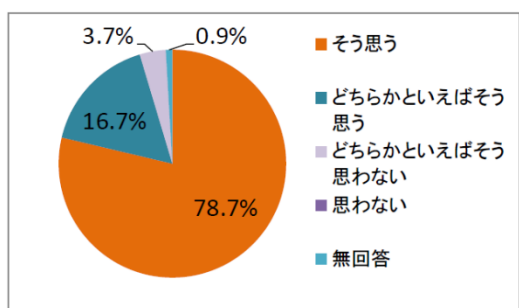
⑤がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う(事業実施前)

そう思う	55
どちらかといえばそう思う	38
どちらかといえばそう思わない	14
思わない	4
無回答	1



⑤がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う(事業実施後)

そう思う	85
どちらかといえばそう思う	18
どちらかといえばそう思わない	4
思わない	0
無回答	1



(2) 生徒の感想

- ・がんは、日本人の2人に1人はかかる病気で、自分や家族、誰もがなり得る病気だとわかりました。
- ・がんの原因は生活習慣だけではないけれど、主な原因の一つであることがわかりました。食事や運動など、今自分にできることを考えてやっていくことが、10年先、20年先の自分にとって大切だと思いました。
- ・早期発見、早期治療すれば、がんも治る可能性が高いことがわかりました。がん検診の受診率が低いと聞きましたが、自分は受けていきたいと思いました。家でも親が受けているか聞いてみたいと思います。
- ・がんになったら今までの生活が全て変わってしまうので怖いという思いしかなかったけれど、がんになっても自分らしく生きている方の話を聞いて、自分がもしがんになったら同じように生きていきたいし、家族ががんになったらサポートしていきたいと思いました。

(3) 評価

がん教育モデル授業指定校の2校における意識調査では、「①自分はがんにならないと思う」という問いに対して、「思わない」という回答が増えたように、誰しもなり得る病気であり、自分事として考えられるようになった。そして、「②健康な体づくりに取り組もうと思う」「③がん検診を受けようと思う」という問いに対して「そう思う」の回答が増えたように、自分の命や健康の大切さに気付き、予防のために今自分ができること、今後できることは積極的にやっていこうという思いをもたせることができた。

また、講師からがん患者の方々の生き方について話を聞いたことで、「④がんになっても生活の質を高めることができる」の問いに対して「そう思う」が大きく増えたように、がんになっても前を向いて生きていきたい、身近な人ががんになったら支えていきたいという思いをもつことができた。

3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

- 令和元年度までのモデル授業では、外部講師に任せる部分が多く、講話的に時間をとって話を聞くスタイルが多かった。しかし、専門医から直接話を聞ける貴重な機会であるため、令和2年度はT2として授業に参加し、1時間の授業の中で、何回もお話をしていただけるスタイルで行った。生徒が疑問に思ったタイミングや、生徒の意見に対してすぐにアドバイスをいただけたことは、生徒の理解を深めることに大変有効であった。
- TTの授業の課題として、どのタイミングでどんな話をしていただくか、事前の打ち合わせが想定していたよりも複数回必要となった。また、生徒が疑問に感じたタイミングで話をできたのはよかったが、時間的に足りなかった。50分授業ではなく、もう少し長い時間を設定するか、内容で2時間に分けて実施するなど、工夫が必要である。
- 文部科学省作成「がん教育推進のための教材 指導参考資料」をもとに、各学校でアレンジをしてプレゼン資料を作成した。各学校の実情や生徒の実態によって、内容を工夫し、作り変えることができてよかったが、今後は、過去の指導資料をもとに、県としてのプレゼン資料をさらに活用しやすいものにしていく必要がある。
- コロナ禍で、外部講師である医師が学校で話をすることが難しい時期があった。そこで、モデル校1校は、オンラインで講師が参加する方法をとった。ICT機器の環境整備が進んだこともあり、TT方式でも実施することができたが、教室の様子を全て伝えることは難しく、教師や病院側でサポートしていた指導主事から、様子を伝えなければいけない場面があった。オンラインで実施する場合には、講話的にまとめてお話をいただく方が望ましいと感じた。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- 令和元年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で授業時数の確保が難しかったこともあり、1時間の保健体育科の授業につめこんだ形となった。TT方式での一つのモデルはできたが、生徒ががんに対する正しい知識を習得するだけでなく、自他の健康や命の大切さについて十分考えられるようにするためには、学級活動や道徳、総合的な学習の時間など、他の教育活動と関連させた健康教育の一環としてのモデルを示していく必要がある。
- 外部講師の確保については、がん診療連携拠点病院を中心に依頼を進めてきた結果、県内6地区全てで連携を図ることができた。しかし、学校数に対して対応できる医師の数は少ないため、学校医等の協力も必要である。また、がん患者、がん経験者の方で、協力をいただける方は増えてきたものの、実際に外部講師として授業に参加した経験のある方は少ないため、事前打ち合わせや研修も必要である。
- 外部講師については、市町村から依頼があった際に紹介をしている段階であり、各市町村や学校が直接依頼していけるような体制にまでするには、外部講師の人数、謝金等、まだまだ課題が多くある。
- がん教育の進め方について、保健主事や養護教諭に対しては、研修会等で周知を図ってきたが、保健体育科教諭に対して研修をする機会がなかったことから、令和3年度は、「がん教育指導者研修会」や保健体育科教諭を対象とする研修会で周知を進め、がんに対する教職員の指導力向上を図っていく必要がある。

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

全員で15人

医師2人（静岡県医師会副会長、医療行政・疾病対策課長）、がん経験者1人（元校長）、対がん協会1人、患者会1人、モデル校2人（高校養護教諭、中学教頭）、総合教育センター指導主事2人（高校保健体育、中学保健体育）、教育事務所2人（養護教諭）、教育委員会事務局4人

2. 開催時期、検討内容

<第1回>

期日：令和2年6月30日（火）

場所：静岡県庁

内容：がん教育の推進に向けた計画や進め方について検討（事業概要説明、モデル校の取組、がん教育の実践紹介（学校の実践、患者会の実践）、教職員、外部講師等の研修会について検討等）

<第2回>

期日：令和3年1月12日（火）

新型コロナウイルス感染症拡大のため開催中止。書面開催とする。

② 教育委員会としての取組

○令和2年度がん教育教職員研修会

日 時：令和2年11月2日（月）

場 所：静岡県立藤枝西高等学校

参加者：藤枝西高校教職員、中学校・高校の希望者（保健主事、保健体育教諭、養護教諭、教頭）21人

講 義：「がんという病気をどうとらえるか？」

藤枝市立総合病院 緩和ケア科部長 吉野 吾朗 氏

説 明：①静岡県のがんの現状と対策

静岡県健康福祉部 医療局 疾病対策課 がん対策班

②新学習指導要領について

静岡県総合教育センター 高等学校支援課

③がん教育を行うにあたって 健康体育課

○がん教育における外部講師派遣可能病院一覧の更新

令和元年度に作成した外部講師派遣可能病院一覧の更新を行った。一覧には、がん教育の派遣可能な地域（市町等）、講師職名、テーマ、対象、規模形態、費用等を掲載し、県立学校に一覧表を配付した。外部講師派遣を希望する学校については、県教委が取りまとめ、医療機関に連絡するという体制にしている。

○事業成果の普及

令和2年度がん教育総合支援事業におけるがん教育モデル校の実践について、次年度に開催される体育主任研修会や養護教諭研修会、保健主事研修会等で「がん教育実践報告」として発表する機会を設け、各校に周知した。

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

県健康福祉部医療局疾病対策課がん対策班に依頼し、がん教育教職員研修会にて「静岡県のがんの現状と対策」について、資料提供とともに説明をしてもらうことで、県の状況等をより深く周知する機会となった。

(2) モデル校における取組

【静岡県立藤枝西高等学校】

○取組テーマ

がんに関する知識やがんの原因などの理解を深め、がん教育の学習を通して疾病の予防や、命の大切さを考える。現在の自分や家族、また、未来の自分と家族の QOL を高めるために、基本的生活習慣の確立を意識させる。

○取組内容

対象	実施時期	実施科目等	授業時数	内容
1 年 5 クラス	11 月	保健	1	 「生活習慣病とその予防」の単元にて、がん教育を扱う。 ・ がんと生活習慣との関係を学び、自分の生活を振り返り、将来を考える。 ・ 授業用のプリントを作成し、どのクラスも同じ物を使用した。文部科学省「がん教育推進のための教材 補助教材」スライド教材モジュール 4、5 を使用。
1 年全員 2 年希望者	12 月	LHR	1	講演：「がんという病気をどうとらえるか？」 「看護をする中で大切にしていること」 講師：藤枝市立総合病院 緩和ケア科部長 医師 吉野 吾朗 氏 緩和ケア認定看護師 石川 達也 氏
1 年・2 年医療系進学希望者				「医師及び看護師との座談会」 講演終了後、1・2 年生の希望者、PTA 保健委員が参加。事前に聞きたいことを調査の上、実施した。
3 年選択	1 月	家庭科	1	がんを含む疾病予防のためのバランスの取れた食事の献立作成と調理実習。レシピ作成。
2 年生物	1 月	生物	1	DNA の単元で、がんの発生と進行について学ぶ。
教職員	12 月			職場の健康づくり講座を利用し、健康診断の結果の見方や振り返り、がんを含む疾病や生活習慣について学び、自身の行動習慣等について考えた。
生徒保健委員会	2 月			2 年生の保健委員が、文部科学省「がん教育推進のための教材 補助教材」のスライドや、公益財団法人がん研究振興財団のリーフレット等から、がんについて学び、2 月の学校保健委員会で発表した。1 年生は保健の授業、及び講師による講演会の内容をまとめて、掲示物を作成した。

毎月発行の保健だよりで、がんについて掲載し情報発信を行った。

保健だよりの資料は文部科学省「がん教育推進のための教材 補助教材」を引用し、基礎的な知識を学ぶ機会とした。

【長泉町立長泉中学校】

○取組テーマ

- ・生活習慣病についての知識を学習し、がん教育の学習を通してがんの知識やがんになる原因、治療などの理解を深め、健康的な生活を送るようにする。
- ・がん教育を通して、生きることの意義や命の大切さを実感し、思いやりの心を育成する。

○関係機関との関わり

- ・長泉町の事業として、平成 30 年からがん検診事業、ピロリ菌検査事業を行っている。ピロリ菌検査は、2 年生を対象に希望制で検査を受けている。
- ・長泉町には、県立がんセンターがあり、最先端の医療を知ることができる。

○取組内容

対象	実施時期	実施科目等	授業時数	内容
3 年	11 月	保健体育	2	単元名「健康な生活と病気の予防（がん教育）」 ・ 10 年後の未来を想像し、がん予防のためにできる具体策を考える。 ・ 成人の生活習慣モデルから、がんの危険要因を探り、予防策を考える。 ・ 10 年後の未来を見据えると同時に、現在の健康的な生活習慣の姿ががん予防に繋がっていくことを学習できるようにする。
3 年	11 月	道徳	1	主題名「雨上がりに咲く向日葵のように『余命半年』宣言の先を生きるということ」 「もしも、自分が余命半年と宣告されたら」 ・ 19 歳で余命半年を宣告された山下弘子さんの生き方を知り、その考え方に触れることで、自分の生きる意味について考えを深める。
全学年 3 年 (集合形式) 1・2 年 (後日、テレビ放送形式)	11 月	学校保健委員会	60 分	外部講師による講演会 講演：「命のホームルーム」 講師：元御殿場西高等学校 校長 菊池 基 先生（ねらい） がん経験者の方からの講演を聞くことで、がんに対する知識や考えを深め、健康的な生活を送れるようにする。 （内容） ・ 御殿場西高校でのがん教育の取組紹介 ・ がんについての説明 ・ がん体験談 4 か月の闘病と 2 回の手術を経験。告知から仕事復帰までの体験談を聴いた。



2. 事業の達成度について

(1) がん教育モデル校における取組について（モデル校における文部科学省アンケート結果より）

がんの学習において、授業前後の結果より「健康な生活を送るために重要だ」と捉えた生徒が 24.0%、「役に立つ」と捉えた生徒が 16.8%増加した。モデル校の取組成果より、がん教育の授業を総合的に行うことで、専門的な知識を得ることができ、自分自身や家族の健康をより考えるようになったと報告があった。がんに対する正しい知識の習得や、検診を受けることの大切さについて等、自分や家族の健康やがんの予防に対する意識の向上が見られた。

【モデル校における文部科学省アンケート結果】

(%)

質問	授業前	授業後	増加
がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ。(そう思う)	74.2	98.2	24.0
がんの学習は、健康な生活を送るために役に立つ。(そう思う)	77.3	94.1	16.8
がんは誰もがかかる可能性のある病気である。	99.5	99.7	0.2
がんは進行すると、今まで通りの生活ができなくなったり、命を失ったりすることがある。	96.5	100.0	3.5
がんは日本人の死因の第2位である。(誤り)	51.8	70.9	19.1
たばこを吸わないこと、バランスよく食事をする、適度な運動をすることなどによって、予防できるがんもある。(正しい)	98.0	99.7	1.7
早期発見すれば、がんは治りやすい。(正しい)	85.6	99.5	13.9
体の調子が良い場合は、定期的に検診を受けなくても良い。(誤り)	93.9	99.2	5.3
がんの治療法には手術治療しかない。(誤り)	84.6	92.6	8.0
がんの痛みは我慢するしかない。(誤り)	89.4	95.7	6.3
自分はがんにならないと思う。(思わない)	40.2	38.0	-2.2
将来、たばこは吸わないでいようと思う。(そう思う)	93.9	87.2	-6.7
日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う。(そう思う)	58.6	77.6	19.0
がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。(そう思う)	66.9	80.9	14.0
がんの治療方法はいくつかあるが、医師が決めるものである。(思わない)	17.7	31.4	13.7
がんになっても生活の質を高めることができる。(そう思う)	36.9	46.2	9.3
がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい。(そう思う)	72.2	80.6	8.4
がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う。(そう思う)	49.0	64.3	15.3
家族や身近な人が健康であってほしいと思う。(そう思う)	90.9	93.6	2.7
長生きをするために、健康な体づくりに取り組もうと思う。(そう思う)	78.3	87.8	9.5

(2) がん教育教職員研修会について（受講者に対するアンケート結果より）

「死というものについて、必ず直面することを、このがん教育を通じて認識させ、どう向き合うかを気付かせたい。また、自分の体を大切にするとともに、他人の体を大切にするという気持ちをがん教育の中で生徒に伝えたい。」「死は必定という言葉が印象に残った。がんにならないようにするには…だけでなく、がんに向き合うことを通して、命について考える教育の必要性を感じた。」等の感想があり、がん教育に対する取組の意欲が高まった。がんにならないための教育ではなく、生と死について考えるきっかけになるような機会としたいという感想からも、教職員ががんを知ること、がんについて考えることの大切さを実感できた研修会であった。

3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

- （1）がん教育を学校保健計画に位置付け、計画的に実施していくよう、体育主任、養護教諭、保健主事等の研修会で働きかけていく。
- （2）がん教育の充実を図るために、県教委主催の教職員対象の研修会を継続して実施し、がん教育について学ぶ機会を作るとともに、学校、教育委員会、医療関係者、がん経験者、患者会等との効果的な連携の在り方について協議し、児童生徒や地域等の実情に応じたがん教育を推進する。
- （3）外部講師の積極的な活用に向けて、医療機関の外部講師リストの更新、がん経験者等の外部講師リストの作成を行い、外部講師を活用したがん教育の実施に向けて体制を整える。
- （4）がん教育を推進していくために、モデル校の実践報告を教職員研修の中に取り入れ、年間指導計画や取組例等、がん教育の実践について発表する。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- （1）「がん教育における外部講師派遣可能病院一覧」を更新し、県立学校に配布した。外部講師を希望する学校は、県で一括して取りまとめ、学校の地域の医療機関に依頼する体制を取っている。今後より積極的な外部講師の活用をしていくために、モデル校以外での実践例をまとめ、外部講師を積極的に活用できる情報の提供をしていく。
- （2）がん教育の外部講師活用には予算が必要である。がん教育の予算の中からできる範囲で、外部講師の謝金等において考えていく必要がある。

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

全員で14人

(内訳：学校医代表(小児科)1人、大学病院医師(がん専門医)1人、大学病院臨床心理士1人、がん経験者1人、校長1人、教職員1人、市町教育委員会1人、県医療保健部1人、県教育委員会事務局6人)

- ・他の組織との連携：県医療保健部、三重大学医学部附属病院の専門医及び同医学部教授等、がん患者支援団体

2. 開催時期、検討内容

7月 第1回協議会…がん教育の推進に向けた事業の検討

1月 第2回協議会…がん教育に関する事業の検証と学校におけるがん教育の進め方について検討

② 教育委員会としての取組

・講習会の開催

県教育委員会が作成したがん教育指導教材のポイントや改訂した箇所について、解説を行い、周知が図られた。また、がん罹患者が家族にいる場合の子どもの心理面等に関することや、がんを経験して感じた思いを伝えるなかで、命の大切さや周りにいる人ができること等、教職員や市町教育委員会担当者を対象に講習会を行った。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大を懸念し、web講習会にて開催した。

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

- ・県医療保健部において、本県のがん診療連携拠点病院である、三重大学医学部附属病院の専門医及び同医学部教授、がん患者支援団体等の関係者と連携を図り、がんに関する教育協議会、がん教育に関する講習会を開催する等、取組をすすめた。
- ・外部講師を活用したがん教育授業では、がん経験者の講師を、三重県がん相談支援センターから派遣していただいた。
- ・がん教育外部講師依頼先リストを活用して、外部講師と取り組むがん教育授業を、県内の小・中・高・特別支援学校に募集し、取りまとめを行った。がん教育授業の事前打合わせは、県教育委員会、市町教育委員会、学校の3者で行い、授業のねらいや配慮すること等を確認した。確認した内容について、県医療保健部の協力を得ながら、県教育委員会が外部講師との窓口となり、連絡を密にして取り組んだ。

(2) モデル校における取組

- ① 紀北町立三船中学校で、学校薬剤師の石淵幹人氏を招聘し、がん教育授業研修会を行った。

(授業内容)

- ・パワーポイントによる講演
- ・がんの基礎知識、自分たちで気をつけること

- ・ 周囲との関わり等
- ・ 生徒からの質問

②市町及び県立高等学校で応募のあった学校において、児童生徒を対象としたがん教育授業を実施した。

- ・ 桑名市立多度小学校・長島中部小学校
- ・ 伊賀市立上野北小学校・名張市立すずらん台小学校
- ・ 津市立榊原小学校・津市立久居中学校・津市立西郊中学校
- ・ 志摩市立浜島小学校・尾鷲市立尾鷲小学校

三重県がん診療連携拠点病院、準拠点病院・地域がん診療連携拠点病院、三重県がん診療連携病院からの専門医及びがん患者支援団体のがん経験者と連携し、指導用教材を活用して、がんに対する正しい知識の習得と理解の深化を図る授業を実施した。



2. 事業の達成度について

・がん教育に関する協議会、外部講師を活用した授業前後に児童生徒に「がんの学習アンケート」を行い、集計・グラフ化したもの及び児童生徒の感想を課内資料・協議会資料とし、令和3年度のがん教育の方向性を話し合うことができた。また、アンケートの結果については、実施校・講師等にもフィードバックを行った。また、アンケートには児童生徒からの質問が多数あり、後日講師からの該当校に伝えた。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症のこともあり心配されたが、計画通り実施できた。

3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

1 教職員へのがん教育の必要性の意識啓発

例年、夏に2回の研修会（医療従事者・がん経験者による講義）を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止を考慮し、1回の対面式講習会とwebでの開催に変更して実施する。

2 本人を含め、身近にがん患者がいる、またはがん等で亡くなった家族等がいる児童生徒への配慮の在り方と具体的な手だて等

3 県教育委員会ホームページに掲載している指導用教材や手引きの改訂と更新

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- ・「がん教育」学校用教材の周知や普及に向けた取組
- ・高等学校における取組の拡大
- ・各市町によるがん教育の取組の拡大

令和2年度

がん教育総合支援事業 事業成果報告書

地方公共団体名

兵庫県

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員（15名：医師1名、大学教授1名、県健康福祉部1名、県教委3名、校長4名、養護教諭3名、教職員2名）

構成員氏名	所属及び役職
橋本 彰則	県医師会 常任理事
中村 晴信	神戸大学大学院 教授
廣瀬 雅樹	県立北摂三田高等学校 (モデル校) 校長
草薙 美佳	猪名川町立猪名川中学校 (モデル校) 校長
中條 浩樹	姫路市立朝日中学校 (モデル校) 校長
立田 仁美	洲本市立加茂小学校 (モデル校) 校長
高田 紀子	県養護教諭研究会連盟 会長
山内 浩	県立北摂三田高等学校 (モデル校) 授業担当教員
川名 達朗	猪名川町立猪名川中学校 (モデル校) 授業担当教員
藤本 朋子	姫路市立朝日中学校 (モデル校) 授業担当教員
奥井 美穂	洲本市立加茂小学校 (モデル校) 授業担当教員
田所 昌也	県健康福祉部感染症等対策室疾病対策課長
山根 尚	県教育委員会事務局体育保健課長
森鼻 崇文	県教育委員会事務局体育保健課主任指導主事兼主幹
栗山 尚子	県教育委員会事務局体育保健課指導主事

2. 開催時期、検討内容

○第1回協議会（令和2年8月25日 兵庫県民会館）

議事

- (1) がん教育に関する計画（案）について
- (2) がんに関する事業内容について
 - ア がん教育に関する授業の実施について
 - イ 講演会について
 - ウ 研修会について
 - エ アンケートについて
 - オ 今後の取り組みについて

○第2回協議会（令和3年1月25日 兵庫県民会館）

議事

- (1) 令和2年度成果と課題について
- (2) 外部講師窓口リストについて
- (3) 令和3年度がん教育総合支援事業について

② 教育委員会としての取組

○モデル校4校（高等学校1、中学校2、小学校1）に講師を派遣し、講演会を開催した。

※詳細は、(2)モデル校における取組に記載のため省略

○がん教育に関する教職員及び外部講師対象の研修会の開催（令和2年12月10日（木））

学校におけるがん教育において、外部講師の関わり方を充実させることにより、より効果的ながん教育の実施を図ることができるように、外部講師及び教職員、市町組合教育委員会担当者等対象に開催した。

本研修会では、各モデル校の取り組みを共有するとともに、文科省のモジュールをベースに協議会が作成したがん教育授業用PPTを使用して模擬授業を実施した。また、筑波大学の野津有司教授を招聘し、「学校におけるがん教育の推進主体的・対話的で深い学びを考える」というテーマで講演頂いた。

【参加人数：外部講師4名、教育事務所3名、教育委員会11名、教職員100名、計118名】

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

○県健康福祉部と連携し、がん診療連携拠点病院や県医師会の協力を得て、外部講師となりえる医療関係者等に対して、外部講師向け研修会を実施した。内容としては、筑波大学 野津 有司 教授に新学習指導要領を踏まえたがん教育の考え方と進め方についてご講義いただいた。野津教授からは、ブレインストーミングを活用した教育技術の演習を取り入れてご講演いただいたので、外部講師が講演会等の際に役立つスキルを学べた。

○外部講師の連絡体制が取りやすくなるよう、県健康福祉部と連携し、がん診療連携拠点病院における外部講師の窓口担当者リストの作成に向けて取り組んでいる。

○学校医やがん専門医が外部講師として指導する際の参考となるよう、発達段階に応じた小学校・中学校・高等学校向けの文部科学省のモジュールを組み合わせたスライド及び読み原稿を作成している。

(2) モデル校における取組

○令和2年11月5日 洲本市立加茂小学校

淡路島内で訪問看護リハビリセンターやケアプランセンター等を運営している、株式会社あべいすより講師を招聘して、がんの基礎知識を中心に、がんやがん患者について正しく理解することを目的として、児童との対話を中心とした講演会を行った。

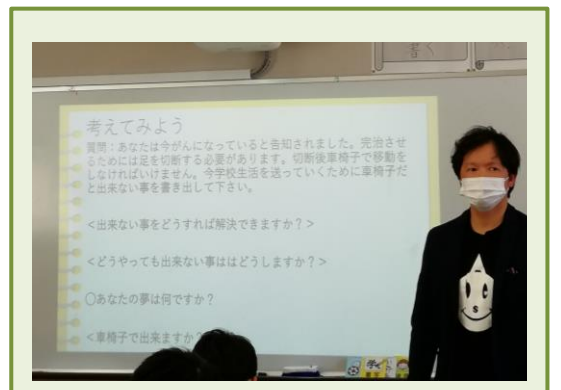
養護教諭が事前にがんの知識に関する授業を行い、健康や命の大切さについては重点的に考えられるよう、講師と事前に連絡調整を密に行った。

【講師】株式会社あべいす 理学療法士 安部 則行 氏
同社 作業療法士 富本 紘之 氏

「がんについて知ろう」

【参加人数】6年生児童及び教職員等 33名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間 1時間



○令和2年10月8日 猪名川町立猪名川中学校(1回目)
川西市医師会に依頼し、学校医もされている医師を招聘して、がんやがん患者について正しく理解することを目的として講演会を実施した。

講演後には、学校関係者の広報係が、SNSを活用して、即座に保護者等へ発信された。

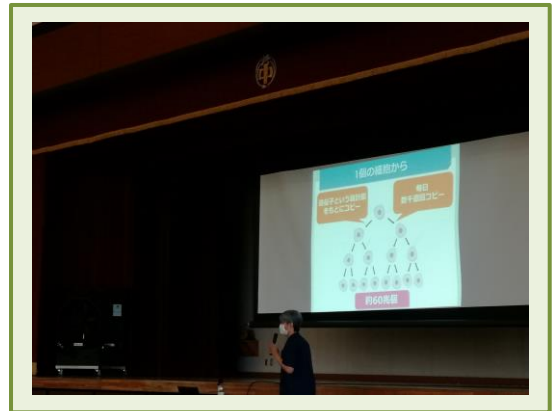
【講師】川西市医師会 植田循環器内科クリニック

院長 植田 充典 氏

「がんを知って、がんに対して私たちができること」

【参加人数】1年生及び教職員、保護者等 239名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間 1時間



○令和2年11月10日 猪名川町立猪名川中学校(2回目)

猪名川中学校では、外部講師による講演会で1年次ががんの知識について学び、2年次に保健の授業でがんについて学ぶことから、外部講師による講演会をとおして、健康や命の大切さについて考えられるよう系統的に計画している。今回も、講演後には学校関係者の広報係が、SNSを活用して、即座に保護者等へ発信された。

【講師】チャイルド・ケモ・クリニック

副理事長 田村 亜紀子 氏

「がんになっても笑顔で育つ」

【参加人数】2年生及び教職員、保護者等 264名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間 1時間



○令和2年11月30日 姫路市立朝日中学校

従前よりがん教育に関する職員研修等で、ご協力頂いている方を講師として招聘し、がんに関する基礎知識を中心として講演会を実施した。

【講師】チャイルド・ケモ・クリニック 院長 楠木 重範 氏

「がんになっても笑顔で育つ」

【参加人数】2年生及び教職員、保護者等 約281名

【実施科目・授業時数】総合的な学習の時間 1時間

○令和2年11月12日 県立北摂三田高等学校

学校OBである医者と連携して、がんやがん患者について正しく理解することを目的として講演会を実施した。

【講師】三田市民病院 医長 池田 敦史 氏

「がん教育に関する講演会～消化管がん診断と治療～」

【参加人数】1年生及び教職員、保護者等 約233名

【実施科目・授業時数】保健体育の時間 1時間

2. 事業の達成度について

- アンケート結果から 13 項目抜粋。昨年度は変容の大きかった 11 項目を抜粋したが、追加した項目(3)の ij)はそもそも%が高いが、今後評価として見ていくのに大事な項目のため今回追加している。
- 斜体は質問項目から予め削除した項目（猪名川中学校 1 年の項目）。
- 昨年度より増加率が低かったのは、除外した項目があったり、継続した結果、知識があったため変容が出にくいことが考えられる。アンケート結果より、下記 1 3 項目中 1 2 項目が実施後、増加した。
- (2)2)c「がんは日本人の死因の第 2 位」、(3)3)a「自分はがんにならないと思う」項目について、昨年度より増加しており、がんを身近なものとして捉え、全体的に正しい知識が得られた。
- 学校医による講演後は下記 1 0 項目中(3 項目は除外) 6 項目において、他校と比較して増加率が最も大きく、学校医による講演が効果的であった。
- 教職員・外部講師を対象としたアンケート結果は、概ね良かったという意見が多かった。
- モデル校での授業及び講演会で外部講師向け教材の検討が行えた。
- モデル校において、どの学校においても継続的に実施可能な取組を実施・検討できた。
- 発達段階に応じた系統的に学べるがん教育の推進が検討できた。

	がんの学習について	実施前	実施後	増減
(1)	1) a がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	73.7% (75.8)	90.0% (92.9)	+16.3 (+17.1)
	1) b がんの学習は、健康な生活を送るために役立つ。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	72.1% (74.2)	88.6% (91.3)	+16.5 (+17.1)
	がんやがん患者に対する正しい理解と認識を学ぶことができた。	実施前	実施後	増減
(2)	2) c がんは日本人の死因の第 2 位である。 「誤り」と答えた児童生徒の割合	58.3% (50.0)	74.3% (63.8)	+16.0 (+13.8)
	2) e 早期発見すれば、がんは治りやすい。 「正しい」と答えた児童生徒の割合	91.5% (92.1)	90.7% (98.8)	-0.8 (+6.7)
	3) e がんの治療方法はいくつかあるが、医師が決めるものである。 「そう思わない」と答えた児童生徒の割合	19.4% (22.0)	30.4% (40.4)	+11.0 (+18.4)
	3) f がんになっても生活の質を高めることができる。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	18.6% (22.8)	33.9% (47.1)	+15.3 (+24.3)
	3) g がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	54.9% (72.2)	64.8% (83.6)	+9.9 (+11.4)
	健康の大切さについて主体的に考えるようになった。	実施前	実施後	増減
(3)	3) a 自分はがんにならないと思う。 「そう思わない」と答えた児童生徒の割合	37.9% (35.8)	49.0% (44.4)	+11.1 (+8.6)
	3) c 日頃から、バランスの良い食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	60.3% (57.9)	74.2% (78.4)	+13.9 (+20.5)
	3) d がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	51.3% (60.8)	70.1% (77.6)	+18.8 (+17.6)
	3) h がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	43.2% (44.9)	56.7% (66.3)	+13.5 (+21.4)
	3) i 家族や身近な人が健康であってほしいと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	92.7% (93.1)	94.1% (95.2)	+1.4 (+2.1)
	3) j 長生きをするために、健康な体づくりに取り組もうと思う。 「そう思う」と答えた児童生徒の割合	78.6% (78.0)	83.6% (87.7)	+5.0 (+9.7)

3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

- アンケート結果より、昨年度と同様の上記 1 1 項目中 1 項目が実施後、減少した。講演内容と関連がなかった部分は正しい知識が得られていない。
- がん経験者やがん家族の講演会内容は、がん経験者としての印象が強く残り、アンケート項目の「がんは日本人の死因の第 2 位である」「早期発見すれば、がんは治りやすい」「体の調子が良い場合は、定期的に検診を受けなくても良い」「がんの痛みは我慢するしかない」について、講演内容と異なる回答が増加。がん経験者の講演会を行う場合、知識面については教職員による授業で補足する必要がある。
- 「がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい」「がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う」項目については、昨年度より減少しており、がんと共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成には、今後も継続して取り組む必要がある。
- 事前・事後指導や実践事例、外部講師への依頼方法、保護者あての文書の見本の周知。
- 配慮すべき児童生徒がいる場合の具体的な対応の仕方。
(事前・事後にどのように配慮したか。具体的にどのような配慮をしたか。児童生徒への配慮が“授業を受けなくても良い”ことしかできていないのではないか。)
- 時間の確保が困難。
(大規模校・高等学校では時間確保が難しく、協力・理解を得られにくい。)

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- 外部講師向け教材の周知、外部講師の窓口リストの周知、がん教育の県内への普及・啓発、講師謝金等の経費の確保、教育課程や年間計画に位置付けた実践例の周知が必要。
- 健康教育として一貫して行っているうちの一つとしてモデル校では取り組んでいるので、実践発表時には他校にもわかるように年間計画の実践例を周知するなど工夫をしていきたい。

1. 事業の具体的内容について

（１）自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

全員で12人

(内訳：学校保健技師・大学教授（放射線腫瘍医学）・県医師会理事・小中高校長6名・県福祉医療政策部
疾病対策課課長・県教育委員会事務局学校教育課課長・県教育委員会事務局保健体育課課長）

2. 開催時期、検討内容

- ・第1回推進会議（8月）：事業の推進に向けた計画の検討
- ・第2回推進会議（10月）：事業の中間報告と計画の確認
- ・第3回推進会議（2月）：事業成果の報告と検証・課題の検討

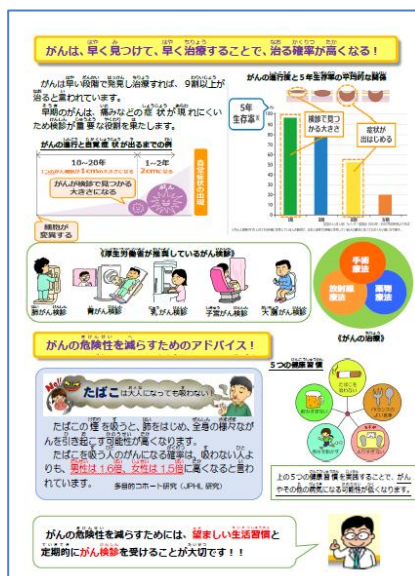
② 教育委員会としての取組

●高等学校における「外部講師を活用したがん教育」

令和2年度の高等学校における「外部講師を活用したがん教育」については、当初は県立高等学校10校での実施を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、授業時間の確保が困難になったことや感染拡大予防の観点から、開催を中止せざるを得なくなった。そこで、人との接触を最小にした形での講演会の在り方を検討し、すでに遠隔授業の設備が整っていた県立高等学校1校において実施した。

●中学校におけるがん教育

中学生向けのがん教育リーフレットの活用方法や補助教材（ワークシート）についてワーキング会議構成員で協議し、その内容を各中学校へ周知した。



中学生用がん教育リーフレット用ワークシート

1. 『がん』について、どのような考えを持っていますか。

2. 『がん』とは、どのような病気でしょうか。

3. 年齢が進むにつれて『がん』になる人の割合が多くなるのはなぜでしょうか。

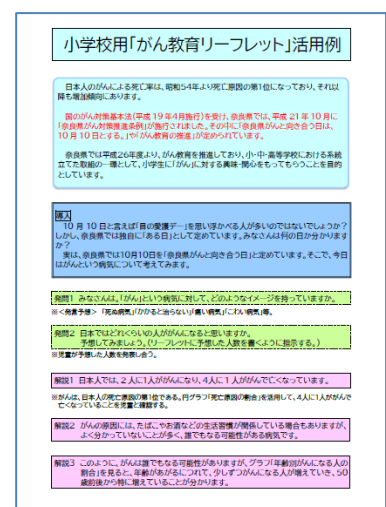
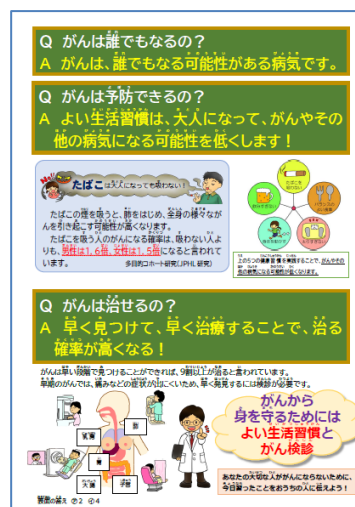
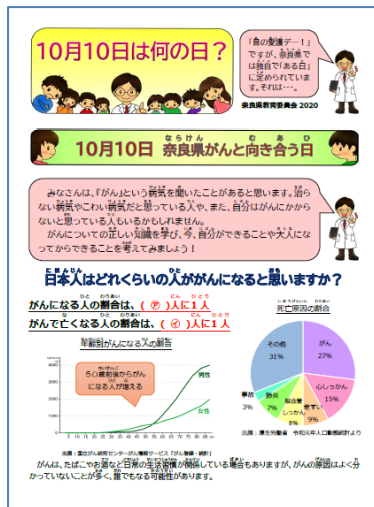
4. 『がん』には治らない病気なのでしょうか。

5. 『がん』になる可能性を減らすためには、どのようなことをすれば良いでしょうか。

6. 「1. 『がん』について、どのような考えを持っていますか。」を学びましたが、学習を通して、どのように考えるようになりましたか。また、考え方の変わった人は、なぜそうように考えるようになりましたか。

●小学校におけるがん教育

小学生用リーフレットを見直し、短時間で展開できるがん教育の活用例と共に「10月10日奈良県がんと向き合う日」に合わせて配布した。ワーキング会議構成員がリーフレットを活用したがん教育の検証を行い、子どもたちの理解や反応を確認した。



●系統立てたがん教育について

上記のように、子どもの発達段階に応じたがん教育の指導内容について検討し、系統立てたがん教育の展開に取り組んだ。

●がん教育研修会

令和２年度の研修会については、文部科学省が主催する「令和２年度がん教育研修会・シンポジウム」にリモート参加する形に置き換えた。直接、調査官の講義や各校種でのがん教育の実践の取組について視聴することができる貴重な機会となった。

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

「外部講師リスト」を作成するにあたり、県福祉医療政策部疾病対策課の勧めにより、奈良県がん対策推進会議の座長であり本事業の協議会の委員でもある県立医科大学長谷川教授から、がん診療拠点病院の医師に外部講師への参加を募っていただくことで、外部講師の確保を円滑に行うことが出来た。

（２）モデル校における取組

「がん教育講演会」として、1年生360人を対象に外部講師による約1時間の講義形式で実施した。生徒の事前調査から、最新のがん治療について知りたいとの要望があり、最初のがんに関する基礎的知識を話していただき、後に最新のがん治療に関する内容を講義いただいた。

先述のとおり、新型コロナウイルス感染症の予防の観点から、全員を一箇所に集合することはせず、会議室に集合し、そこで外部講師からの講演を直接聞くクラス（１クラス４０人）と同時中継により各教室で間接的に聞くクラス（８クラス３２０人）に分かれて実施した。

この形式では、講師としても生徒の反応を見ながら話しを進める事ができ、また生徒としても直接、質疑応答することができ、感染予防をしながらも効果的な講演会であった。しかしながら、講演会の後にグループワークをする等の取組ができず、今後の課題となった。



2. 事業の達成度について

当初、計画していた事業目標に対して、外部講師派遣校の拡大については計画通りに実施することが出来なかったが、その他については概ね計画通りに実施することができた。

令和2年度がん教育の取組状況調査（県独自調査、令和2年11月実施）において、高等学校では78.9%から68.3%へ、中学校では92.2%から85.3%へ減少した。小学校では、71.8%から72.5%とほとんど変化は無かった。小学生用のがん教育リーフレットの配布は5年目を迎え、各校での取組が定着しつつあると思われる。

また、学習指導要領の改訂を受け、令和4年度からがん教育についても全ての高等学校で実施することが必須となるため、令和3年度からは外部講師派遣をモデル校としての取組ではなく、各学校からの依頼を受け外部講師を派遣する形とした。毎年10校程度の学校へ外部講師を派遣する予定であるため、円滑な実施のために外部講師リストの確保や派遣システムの構築を目指し、外部講師リスト及び外部講師派遣様式の作成を行った。

3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

現在は、国費により外部講師派遣にかかる謝金等に十分な予算が得られているが、今後、国の支援が受けられなくなった場合でも外部講師派遣を継続可能なものとするため、がん療養拠点病院等との連携を図っていく必要がある。

また、まだまだがん教育の実施率が十分とは言えないため、各校でのがん教育について、指導にあたる教員の知識不足やがん教育の必要性について理解を得られるよう研修会の充実や周知の方法を効果的にするなど工夫し、がん教育の実施率が向上するように努める。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

今後、がん教育に特化した授業時間の確保が益々困難になることが予想されるため、授業の中で活用できる形でのがん教育教材の作成や、外部講師の専門性を生かしたがん教育の展開について検討していく必要がある。

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

全員で15人

内訳：がん専門医（呼吸器内科・腫瘍内科）1人、県学校医会（小児科）1人、県連合小学校長会1人、
県中学校長会1人、県立学校長会1人、県学校保健主事研究会1人、県養護教諭研究会1人
モデル校担当教員3人、健康局健康推進課1人、学校教育局教育支援課1人
事務局3人（義務教育課1人、教育支援課2人）

2. 開催時期、検討内容

新型コロナウイルス感染症の影響により開催を見合わせた。

② 教育委員会としての取組

○普及・啓発

教職員及び医療・保健関係者を対象に、本県におけるがんの状況及びがん教育の実施状況、がん教育推進に係る法的根拠、学習指導要領の趣旨、外部講師依頼時の要点、各発達の段階における取扱等について説明を行うとともに、がん専門医による講演で文部科学省の教材を活用した外部講師によるがん教育の推進について働きかけるため、研修会の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により開催を見合わせた。

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

- ・本県のがんに関する現状等について教材を作成するための検討
- ・外部講師を確保するため、がん診療拠点病院及びがん患者連絡協議会との連携
- ・和歌山県医師会や病院協会等と連携を図り、外部講師リストの作成

(2) モデル校における取組

○有田市立初島中学校

テーマ：「がんについて生活習慣から見直そう」

日 程：令和2年11月6日

講 師：和歌山県立医科大学附属病院 病院教授 上田 弘樹 氏

対 象：3年生16名

内 容：生徒の理解を促すため、文部科学省作成の教材を活用した講義とワークショップを取り入れて実施した。

○外部講師の活用に当たって工夫している点

新型コロナウイルス感染症の影響により、外部講師を活用したがん教育の実施に当たって、事前打合せにおいて場所や時間等機会の設定が困難であった。そのため、短時間であっても効率的に打合せを行うことができるよう、「がん教育事前打合せシート」を作成し、打合せまでに学校で検討しておくこと及び打合せ時に講師と協議すべきことを明確にできるようにした。

2. 事業の達成度について

令和2年度のがん教育総合支援事業においては、外部講師を活用したがん教育を推進するため、外部講師リストの作成や研修会の実施、モデル校における実践等様々な事業計画を立案していたが、新型コロナウイルス感染症の影響等により、多くの事業について実施を見合わせる事となった。

○協議会の果たす役割についての評価

協議会については、新型コロナウイルス感染症の影響により、一同に参会しての開催はしていないが、必要に応じて各委員から個別に意見を聴取した。また、令和3年度以降に外部講師を活用した効果的ながん教育を推進していけるよう、平成30年度の本県におけるがん教育実施状況等の分析を行った。その結果、外部講師との事前打合せ等をより効率的・効果的に実施できるよう、「事前打合せシート」の作成やオンラインによる打合せ等方法の検討を行うことができ、今後の協議会の在り方等を検討する機会となった。

○がん教育研修会についての評価

令和元年度の研修会については、開催要項を関係機関にも周知したことで、学校関係者だけではなく、市町村の保健師や医療機関の看護師、がん診療拠点病院の職員等職種に広がりが見られた。しかし、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、研修会の開催を見送ったことにより、学校関係者や外部講師等に対してがん教育について啓発する機会を持つことができなかった。

集合形式に限定せず、オンライン形式等により研修会を開催し、がん教育を実施するに当たっては、がん専門医や学校医、がん経験者等外部講師を活用することが効果的であることについて啓発する必要があると考える。

○外部講師リストに関する評価

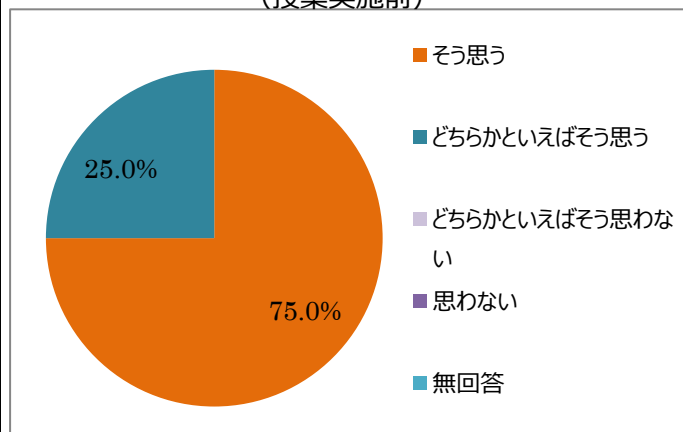
外部講師リストについては、県医師会の会員に周知をし、88名の開業医が外部講師として登録されているが、引き続き、関係機関等と連携を図り、外部講師リストの充実及び派遣のための窓口を設定する。また、外部講師リストの効果的な運用方法及び外部講師リストに記載された外部講師に対する研修の在り方等については検討する必要がある。

○モデル校における評価

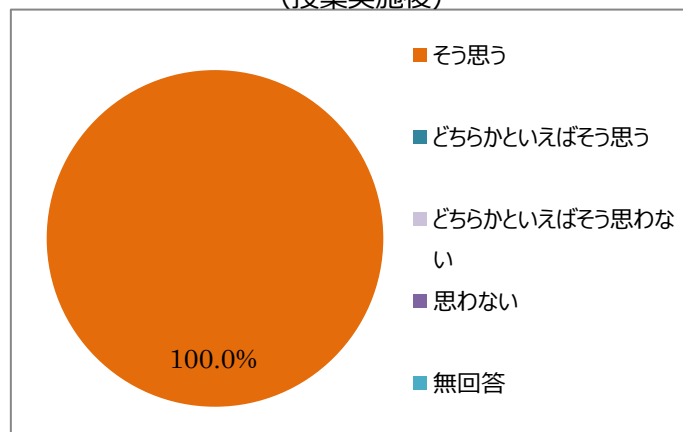
がん専門医を活用したがん教育モデル授業では、実施校数は1校であったが、外部講師を活用する際の事前準備から取組を行ったことにより、打合せの内容や配慮を要する児童生徒への対応等について、今後の参考となる実践を行うことができた。また、生徒を対象とした事前事後アンケートの結果から、がん教育に意欲を持って取り組み、がんについて正しく理解することができたとともに、生活習慣や検診の受診等今後の行動変容につながるような意見が得られた。

【がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ】

(授業実施前)

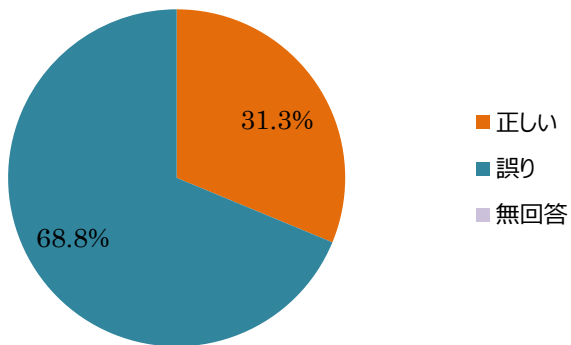


(授業実施後)

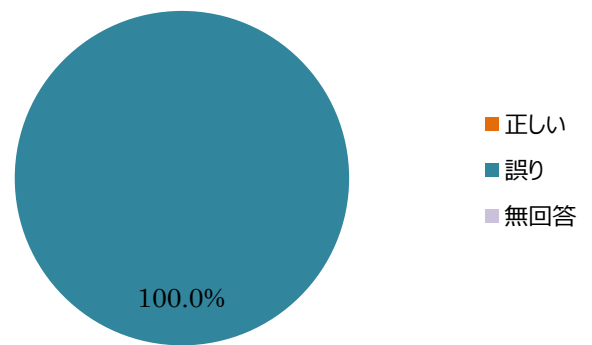


【がんは日本人の死因の第2位である】

(授業実施前)

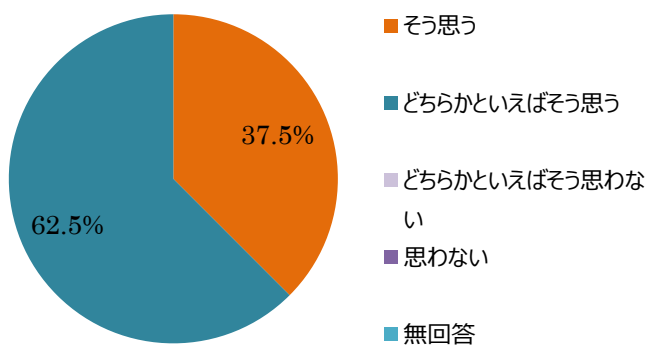


(授業実施後)

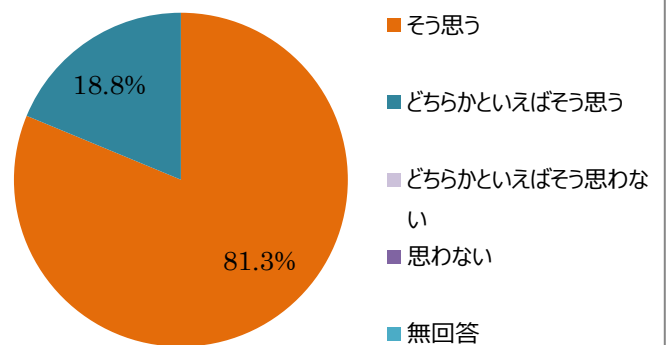


【がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う】

(授業実施前)

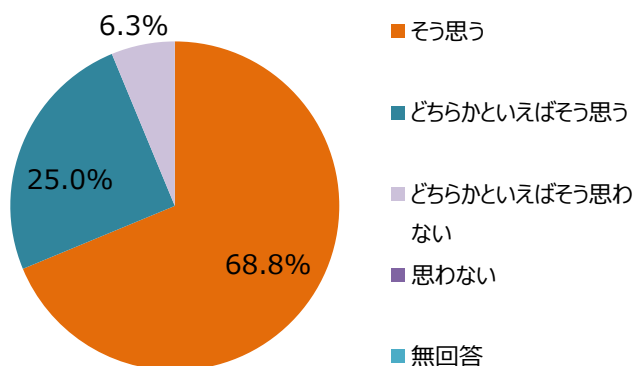


(授業実施後)

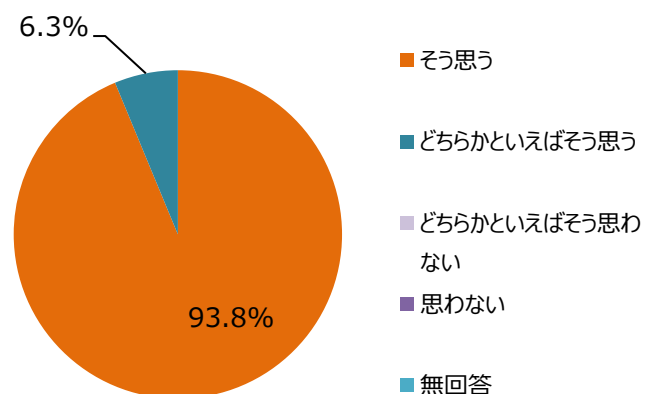


【長生きをするために、健康な体づくりに取り組もうと思う】

(授業実施前)



(授業実施後)



3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

- ・ 新型コロナウイルス感染症の影響等により、令和2年度は、多くの事業について実施を見合わせる事となったが、事業全体を通して、関係機関等と連携を図りながら、本県における外部講師を活用したがん教育も少しずつ軌道にのり始めていることから、今後も継続して事業を推進していきたいと考える。
- ・ 研修会については、外部講師及び教職員を区分して実施し、特に外部講師リストへの登録者に学校医が多いことから、学校医研修会等において研修を行う必要がある。また、県内全域でがん教育を推進するに当たっては、研修会の開催地方を検討するとともに、養護教諭のみならず、保健体育科教諭や管理職、市町村教育委員会の担当者の出席を促す必要がある。
- ・ モデル校について、選定した学校数は少なかったが、中学校1校において、がん専門医を講師とした実践を行った。今後も、校種や外部講師の種類、取扱う時間等により様々なモデルケースを蓄積し、がん教育の在り方や協力体制の整備について検討するとともに、モデル校での実践を先進的な事例として、啓発していく方法についても検討する必要があると考える。
- ・ 文部科学省が作成した教材だけではなく、児童生徒がより身近なこととして捉えることができるよう、和歌山県のがんに関するデータを授業で活用できるような資料にしていきたい。
- ・ 外部講師リストについて、県医師会の会員のみならず、がん診療連携拠点病院等の医療関係者やがん経験者等にも登録していただけるよう働きかける必要がある。また、作成した外部講師リストの運用方法を整備していく必要があると考える。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- ・ 外部講師を活用することにより、がんについて正しく理解し、自らの行動を変容させようとする意識が見られるなど指導効果が高まっていることから、外部講師を活用したがん教育の実施率や課題等を踏まえ、外部講師の活用の在り方について提示する必要がある。
- ・ 外部講師を活用しなかった理由として、「講師リスト等がなく、講師を探すのが難しい。」や「講師との打合せを事前に行わないと、講師の話す内容と学校の要望にギャップが生じる。」が多いことから、関係機関等と連携を図りながら外部講師リストを充実させるとともに、研修会等外部講師活用のためのガイドラインの内容について具体例を示しながら研修会等で周知する必要がある。
- ・ がん教育の実施について、市町村教育委員会及び県立学校に対し、さらに周知を徹底していくとともに、外部講師を活用したがん教育の実践を行い、内容の充実を図っていく。
- ・ 事業全体を通して、関係機関等と連携を図りながら、本県における外部講師を活用したがん教育も少しずつ軌道にのり始めていることから、今後も継続して事業を推進していきたいと考える。

1. 事業の具体的内容について		
(1) 自治体における取組		
① 協議会について		
1. 構成員		
全員で19人（大学教授1人、医師（内科医）1人、薬剤師1人、がん患者団体1人、PTA関係者2人、校長会代表4人、保健体育主事部会代表1人、養護教諭部会代表1人、県職員（福祉保健部含む）7人）		
2. 開催時期、検討内容		
・第1回がん教育推進協議会（9月） 鳥取県がん教育実践事例集の活用方法や外部講師の確保等について協議した。		
・第2回がん教育推進協議会（12月） 外部講師の所属する会の名称や来年度の公開授業等について協議した。		
② 教育委員会としての取組		
実施時期	がん教育に関する計画	参加者
4月	公開授業実施校の決定	
9月24日	第1回がん教育推進協議会	14名（欠席5名）
10月28日	公開授業の実施（岩美町立岩美西小学校） 対象学年：6年生	23名（養護教諭、がん経験者等）
11月26日	公開授業の実施（岩美町立岩美中学校） 対象学年：2年1組	22名（養護教諭、がん経験者等）
11月27日	鳥取県がん教育啓発研修会 （ハワイアロハホール）	58名（管理職、養護教諭、がん経験者等）
12月 8日	公開授業の実施（県立鳥取工業高等学校） 対象学年：1年制御・情報科	16名（養護教諭、がん経験者等）
12月10日	第2回がん教育推進協議会	13名（欠席6名）
③ 保健部局や地域の専門機関等との連携		
福祉保健部が主催する「出張がん予防教室」を活用することで、学校のニーズにあった講師を依頼することができた。県医師会と県教育委員会で、がん教育の推進に向けて協議を行うなど連携を図っている。		

(2) モデル校における取組（実施前後に、がんに関するアンケートの実施）

・岩美町立岩美西小学校におけるがん教育

10月28日（水） がんに関する公開授業の実施

講師：県内 がん経験者「生活習慣病の予防」

本県で初めて、県内のがん経験者を講師とした授業づくりを行った。

事前の打合せの中で、小学生という発達段階や学級の雰囲気などを外部講師に伝え、授業の流れなどを確認した。

当日の授業では、自分の病気ががんと聞かされた時の心情や早期発見の大切さなどについてわかりやすく講話していただいた。



・岩美町立岩美中学校におけるがん教育

11月26日（木） がんに関する公開授業・講演会の実施

講師：県内 がん経験者「健康な生活と病気の予防」

本県で2例目の、県内のがん経験者を講師とした授業づくりとした。

講師の方の体調がすぐれないこともあり、電話で事前の打合せを行った。

生徒に向けて、自分ががんと宣告された時にどう接してほしいか、命の大切について具体的に講話していただいた。



・県立鳥取工業高等学校におけるがん教育

12月 8日（火） がんに関する講演会の実施

講師：県外 がん経験者「がん患者への理解と共生」

生きることの素晴らしさや大切さについて、がんを通して講話をいただいた。

(3) がん教育啓発研修会の開催

新学習指導要領を踏まえたがん教育の進め方等について、大学教授等を招いて県内の小、中、高等学校の教職員58名が研修を受けた。

11月27日（金） 13：10～16：15

講演 「学校におけるがん教育の効果的な指導方法について」

講師 日本女子体育大学スポーツ健康学科 教授 助友 裕子 氏

講義 「子どもたちの愛顔（えがお）につながるがん教育を目指して」

講師 愛媛県教育委員会保健体育課 指導主事 大野 小百合 氏

（当日の感想）

- ・がん教育は子どもたちにとっては「生き方」を学ぶ学習だと感じた。
- ・当日の配布資料を、校内のカリキュラムマネジメントの参考資料としたい。
- ・がん教育について不安を感じていたが、外部講師の利用の話もあり今後の参考となった。
- ・年間計画に位置付けてまずは他教科と関連させながら取り組みたい。

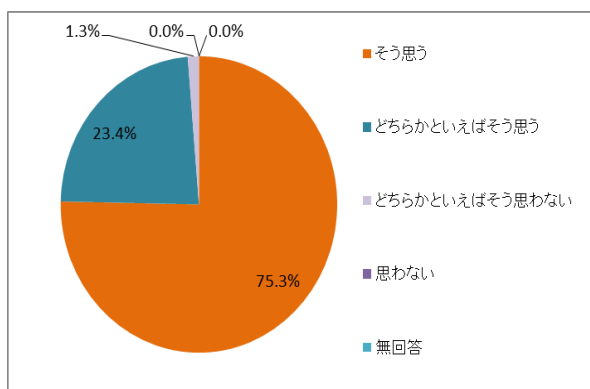


2. 事業の達成度について

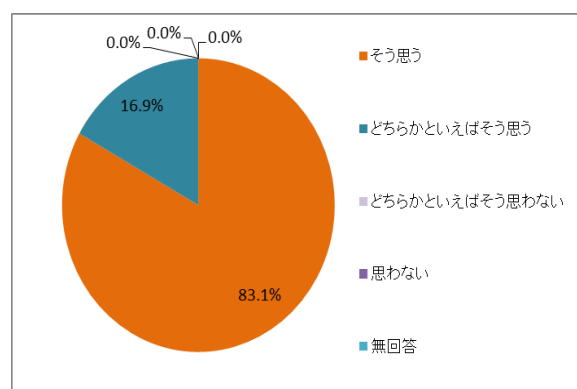
- ・がん教育研修会の参加者の感想では、年間指導計画に位置付け、他教科とも関連させながら実施することの大切さや、人としての生き方を学ぶという意味でも重要な教育と感じたなどの意見が多かった。

＜がんの授業は、健康な生活を送るために重要である＞

(事業実施前)

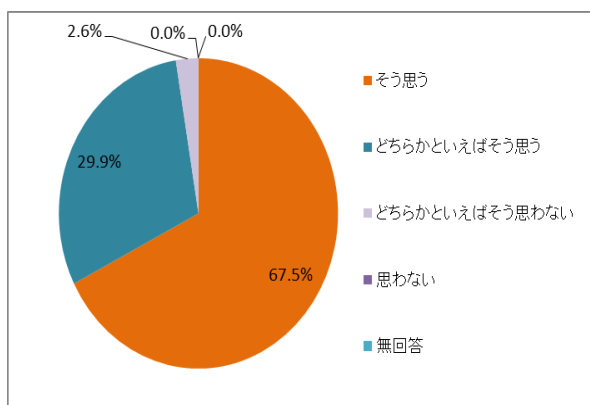


(事業実施後)

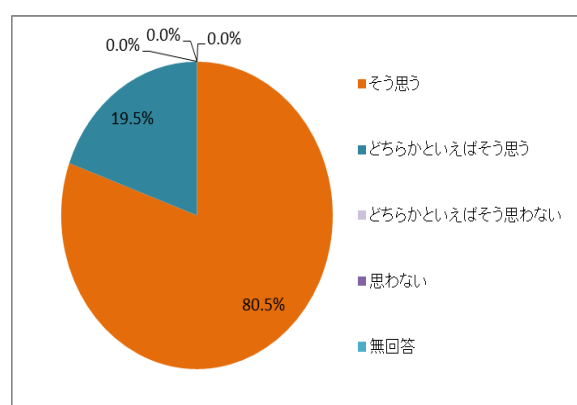


＜がんの授業は、健康な生活を送るために役に立つ＞

(事業実施前)



(事業実施後)



3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

児童生徒にとって効果的な授業となるよう、引き続き研修会等を通じて教職員の理解を図る必要がある。令和元年度に作成した指導参考資料の学校現場での活用が十分図られるよう引き続き周知等が必要である。

公募した外部講師について、依頼できる方のリスト化や活用方法の検討・充実など体制づくりが今後も必要である。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

先進校以外でも取組が広がるように、教職員向け研修会等の機会を通じて周知をしていく必要がある。指導案の作成や教材づくりなど、学校の負担感のない実施に向けて今後も検証が必要である。

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

全員で19人

内訳

- (委員) ○医療関係者…学校医師会1人、拠点病院(小児科)医師1人、緩和ケアセンター医師1人
 ○学識経験者…大学准教授1人
 ○がん経験者…がんピアサポーター1人
 ○学校関係者…高等学校長1人、中学校長1人、保健主事部会長1人、養護教諭代表1人
 ○教育委員会…教育事務所1人
 (実践校) ○モデル校校長(必要に応じて実践者の教諭も参加)
 (事務局) ○県教育委員会…保健体育課長1人、健康づくり推進室5人
 ○県知事部局…健康福祉部健康推進課がん対策推進室1人

2. 開催時期、検討内容

	期 日	内 容
第1回協議会	令和2年7月【書面開催】	・事業概要の説明 ・モデル校での取組計画
第2回協議会	令和2年10月7日(水)	・モデル校の取組(中間報告) ・がん教育推進に向けた意見交換
第3回協議会	令和3年1月28日(木)	・今年度の事業報告 ・モデル校の実践報告 ・今後の課題等についての意見交換

② 教育委員会としての取組

がん教育研修会

日時：令和2年12月3日(木)

目的：がんに対する正しい理解とがん患者に対する正しい認識及び命の大切さに対する理解を深めるとともに、モデル校における実践を通して、学校におけるがん教育の充実を資する。

対象：西部地区の中学校・高等学校・特別支援学校の保健体育科担当教員
 東部地区の中学校・高等学校・特別支援学校の保健体育科担当教員の希望者、
 行政担当の希望者 【参加者131名】

内容：○事業説明

○モデル校の実践発表

○講演 「学校におけるがん教育の考え方・進め方」

講師：聖心女子大学現代教養学部教育学科教授・副学長 植田誠治氏

外部講師リストの活用

知事部局の健康推進課がん対策推進室と連携して作成した「外部講師リスト」を年度当初に各学校へ送付した。モデル校の外部講師を活用した授業は、このリストを活用して講師を選定した。また、モデル校の活用について、がん教育研修会の実践発表で実践例として示した。

がん教育普及啓発リーフレットの作成

全教職員ががん教育の必要性について理解を深めるために、がん教育普及啓発のための教職員向けリーフレットを作成した。各種研修会の機会を通して、説明して配付した。

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

外部講師派遣事業の活用

がん対策推進室が行っている外部講師派遣事業は、学校が保護者を対象としたがんに関する研修会や講演会を開催する際、講師選定や費用を支援する事業である。外部講師リストで講師を選定し、本事業を活用してがん教育を実施した学校もあった。

がん教育研修会の公開

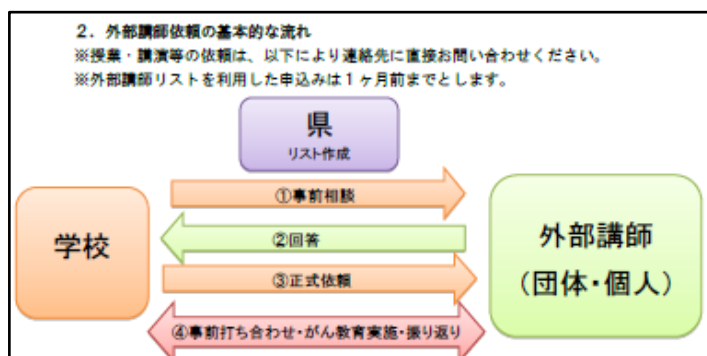
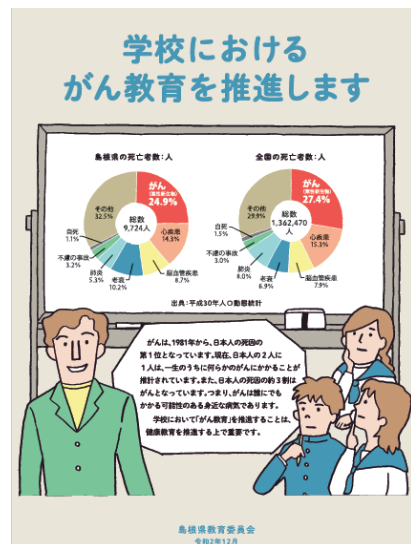
教職員向けのがん教育研修会は、外部講師リストに登録してある方々にも公開した。学校におけるがん教育の実態や様子、推進方法を知ってもらえる機会になった。

外部講師の活用方法

外部講師依頼の基本的な流れについては、がん対策推進室から示している。

〈活用の流れ〉

- ①学校はリストにより依頼する講師を決定し、連絡先へ事前相談
- ②外部講師から学校へ派遣が可能かどうか回答
- ③学校から正式な依頼文書送付
- ④以後、学校と外部講師で授業に向けて打合せ、実施、振り返りを行う



(2) モデル校における取組

島根県立益田高等学校

○取組テーマ

「がんについて正しい知識を身につけ、共に生きる社会づくりを考える」
～カリキュラム・マネジメントの視点から～

○公開授業

◇第2学年 保健体育科（科目保健）

単元名「保健・医療制度及び地域の保健・医療機関」（2時間）

[1時間目] 地域の保健機関の活用について理解する。

- ・益田市のがんやがん検診の状況を知り、課題を考える。
- ・データ分析 個人で考える→グループ活動

[2時間目] がん検診の啓発活動について考える。

- 目標
- ・地域の保健機関の活用について学習し、効果的な改善策の整理に向けての話し合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組むことができる。
 - ・地域の保健サービスの活用について、地域の現状から効果的な改善策を整理し、道筋を立ててそれらを説明することができる。

〈導入〉

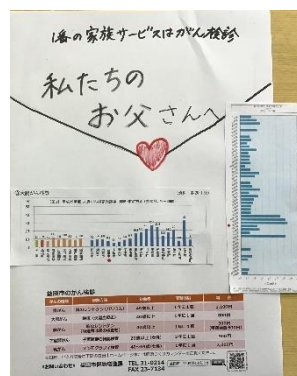
- ・前時の学習を振り返る。

〈展開〉

- ・がん検診のポスターを作成する。
- ・作成したポスターを、道筋を立てて発表する。
- ・益田市のがん検診の実施状況を理解する。

〈まとめ〉

- ・本時を振り返る。



◇第1学年 外部講師を活用した授業

[事前] 保健体育科 (科目保健) 「生活習慣病などの予防と回復」

[本時] 外部講師との授業「がんについて」

ねらい ・がん患者や周囲の人々の生活の質を保つためにできることを考える。

流れ ①がんについての復習

②生活の違いについて (グループで考える→講師の話)

③今の生活で困ること (グループで考える→講師の話)

*講師が一方向的に話すだけではなく、教員主導で授業をすすめ、経験談等に話してもらう。

*事前の打合せ

1) 授業のねらいを確認

2) 授業展開を考え、スライド資料を作成し、
講師の場面での資料を追記 (メールでのやりとり)

3) 当日、授業の前に最終打合せ



○保健部との連携

- ・学校医による保健講話
- ・ほけんだよりの記事

江津市立桜江中学校

○取組テーマ

「がんについて正しく理解し、健康と命の大切さについて主体的に考える生徒の育成」
～教科横断的な取組～

○学校保健委員会「がんについて考えよう～自分と大切な人のために～」

講師：竹林正孝医師 (済生会江津総合病院 副院長)

*講演会にあたり、生徒にアンケートを実施し、その内容を
基に講演を行っていただいた。



○公開授業

◇第2学年 特別活動 (学級活動)

題材名「相手の気持ちを考えて～自分と大切な人のために～」

(2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全

ア 自他の個性の理解と尊重、よりよい人間関係の形成

ねらい ・がん患者の困り感から「相手の気持ちを考える」
とは何をするのかを考え、他者の立場や考えを理解しながら自分の意見を表現している。

〈導入〉

- ・患者への声かけ、困り感を知る。(水泳の池江選手の事例を
挙げ発言の受け止め方を考える。)

〈展開〉

- ・「相手の気持ちを考える」とは何をするのか考える。
個人→グループ活動
- ・各班の発表をする。

〈まとめ〉

- ・クラスで出た意見を意識し、生活に生かしていく。



○生徒会活動での取組

保健体育部の活動として、がんについてのリーフレット



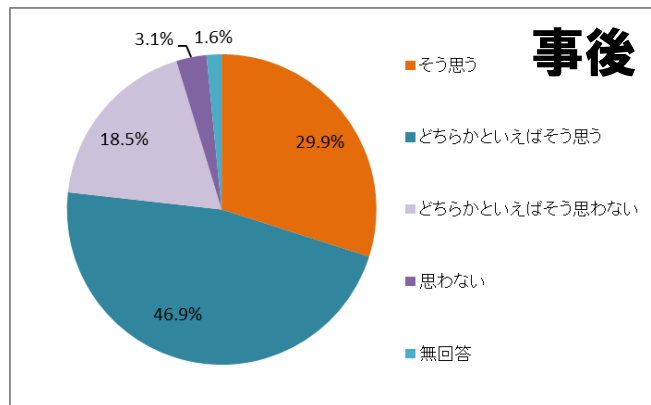
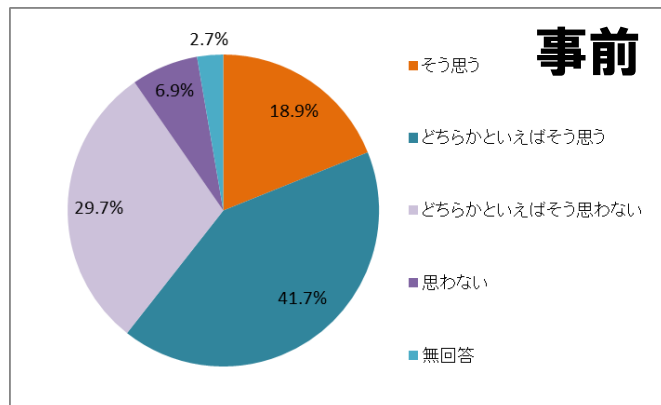
2. 事業の達成度について

モデル校における成果

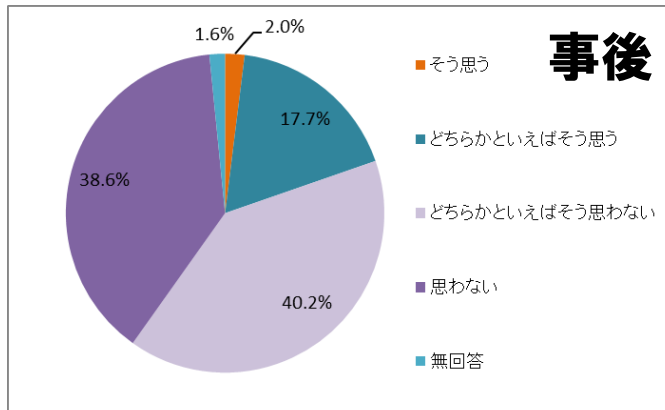
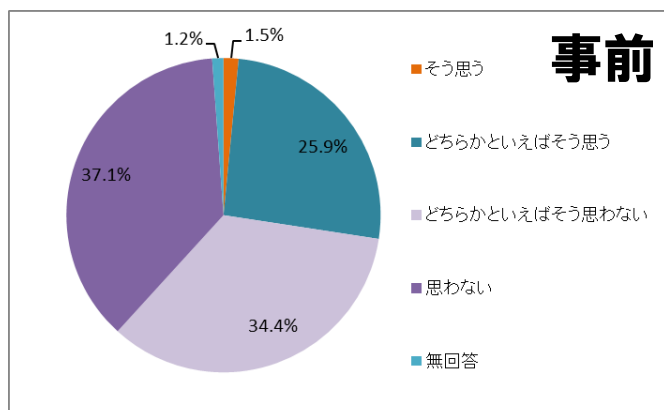
○県立益田高等学校

- ・科目保健を中心に実施し、保健部や他教科との連携をしながら行うことができた。
- ・生徒ががんに対してより身近なものとしてとらえられるようになった。

Q:がんになっても生活の質を高めることができる。



Q:自分はがんにならないと思う。



生徒の感想

(科目保健での感想)

- ・がん検診は自分とは無縁で中年ぐらいから考え始めるものだと思っていたが、若いころこそ検診をすべきだとわかった
- ・どのがんも、早い段階で発見することが大事だということがわかった。
- ・母や父など家族にもきちんとがん検診を受けてもらいたい。

(外部講師を活用した授業での感想)

- ・今ではがんは、身近なものだということがわかり、若いから大丈夫とかではなく、常日頃からの予防が大切だと思った。
- ・身近にがんのみならず、病を持つ人に対してどういう接し方をすればよいか考えるようになった。

○江津市立桜江中学校

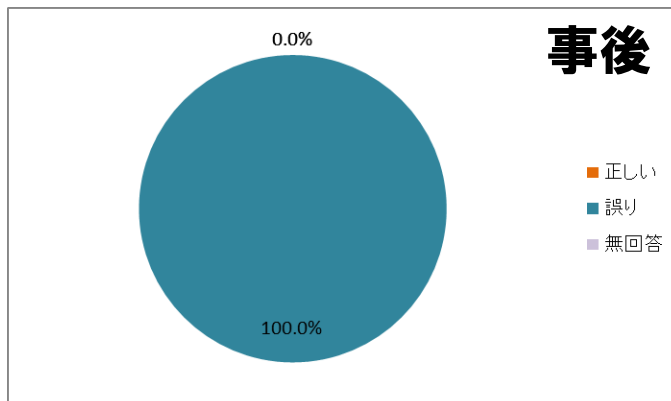
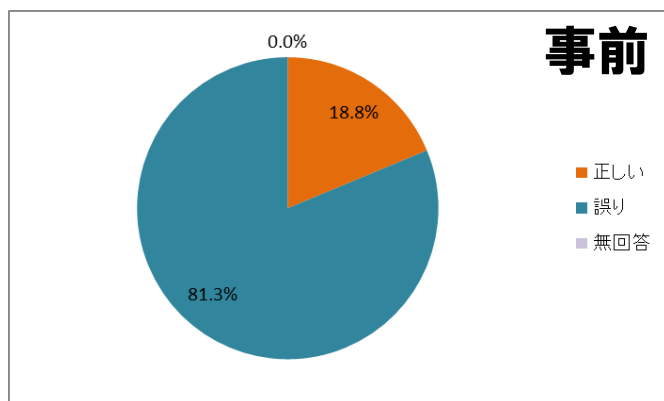
- ・生徒の意識の高まり知識の習得が見られた。
- ・3つの教科・領域で一つの授業という構成にしたので、生徒の意識として残りやすかった。

生徒の感想

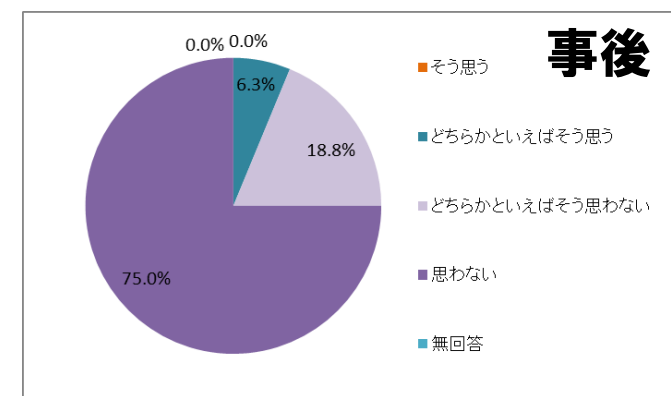
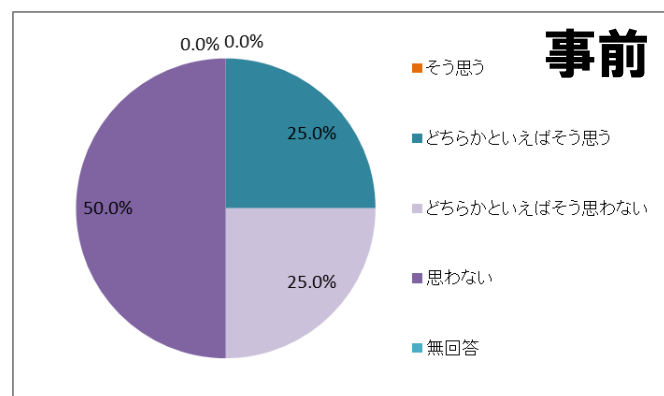
(学校保健委員会での感想)

- ・今日のお話を聞いて、がんのことについてより深く知ることができました。これから、もし周りの人ががんになったら、支えるヒントを思い出し、少しでも力になればいいと思います。健康に気をつけているひとでもなってしまうことがある病気ということを知ったので、祖父母や両親などの身近な人に定期健診を受けるように言いたいです。

Q:体の調子が良い場合は、定期的に検診を受けなくても良い。



Q:自分はがんにならないと思う。



がん教育研修会の成果

〈実践発表に対しての受講者の感想〉

- がん教育について具体的にどんな授業をしたらいいのかわからなかったけど、イメージが持てた。
- 教科横断的な取組は参考になった。保健体育科にあわせ学活、道徳などとの関連を図っていきたいと思う。
- 外部講師を活用した授業展開やポスターを作成することでインプットしたものをアウトプットさせるという活動は、非常に参考になった。
- 外部講師の活用時の講師との連携や、生徒、保護者への配慮など、準備段階での取組や注意すべき点など非常に参考になった。
- 全教職員で具体的に取り組むヒントがあり、早速職員に伝達し、来年度に向けていききたいと思う。
- 学習内容についてとても参考になった。また、配慮することの大切さを改めて感じた。自校の取組に生かすことのできる内容が多くあり、大変勉強になった。

〈講演に対しての受講者の感想〉

- 新学習指導要領の実施の中でがん教育の考え方・進め方を植田先生の講演を基底にして行っていこうと思う。
- 改めて新学習指導要領におけるがん教育の扱いについて整理することができた。
- がん教育の必要性、重要性を改めて理解を深めることができた。授業の内容等を今日の講演を参考に考え直していきたい。
- がん教育プログラムの補助教材を有効に活用して、がんについての正しい知識、理解を進めていきたい。
- 様々な教材や資料が準備されていることを知り、授業でいかに活用していくとよいか研究を深めなければと感じた。
- がん教育について新たに知ることがたくさんあった。生徒にがんに対する正しい知識を伝えることが重要であり、まずは自分自身ががんについて学んでいく必要性を感じた。

3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

- ・今年度作成したがん教育啓発資料（リーフレット）を活用して、がん教育の実践について養護教諭研修や健康教育研修等を通して実施を働きかけていく。
- ・令和元年度、2年度の2年間で取り組んできたモデル校の実践例を県内に広げていく。
- ・がん教育の充実を図るために、がん教育推進のための手引きを作成する。がん教育の考え方、進め方などの総論的な内容や、指導の際の配慮事項、これまでのモデル校の実践例、外部講師を活用した事例、教科横断的な取組例など、1冊にまとめ、学校で活用しやすい形にしてがん教育を推進していく。
- ・配慮する児童生徒について不安がある学校も多く聞かれるので、協議会や拠点病院等と連携して学校の支援方法を考えていく。
- ・今後も学校において外部講師を活用する際、外部講師リストで講師を選定する学校が増えるよう、活用方法や啓発方法等について、がん対策推進室と検討を重ねていきたい。
- ・令和2年度がん教育研修会で、「教師も常に知識理解のアップデートをするために学んでいく必要性を感じた」という感想が多くあったので、引き続き、令和3年度も教職員向けのがん教育研修会を開催していく。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

- ・外部講師を活用するときは、学校が主体であること、打合せや振り返りをする必要があることなど、外部講師の活用方法について、外部講師リストとともに周知していく必要がある。
- ・モデル校以外でも取組が広がるように、研修会を通じて周知していく必要がある。
- ・がん教育を実施する際の配慮をする児童生徒の把握とその対応について周知していく必要がある。

1. 事業の具体的内容について

(1) 自治体における取組

① 協議会について

1. 構成員

全員で23人

【内訳】

県医師会1名、県学校薬剤師会1名、大学教授1名、大学准教授1名、看護師1名、校長6名、教諭1名、県保健主任会1名、県養護教諭会1名、PTA2名、推進地域医師会1名、推進地域教育委員会1名、県医療政策課1名、事務局4名

2. 開催時期、検討内容

1月29日（金）※書面開催

○ 報告

- ① 令和2年度「学校におけるがん教育推進事業」について
- ② 推進校における授業実践について
- ③ 事業推進の成果と課題
 - ・ 「がん教育総合支援事業」評価アンケート結果（対象 小学校・中学校・高等学校）
 - ・ 事業における成果と課題

○ 評議会委員へのアンケートの実施

年2回（7月、1月）予定していたが、7月は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため開催中止。

② 教育委員会としての取組

○ 推進校に外部講師（大学准教授、がん看護専門看護師、がん経験者）を派遣

○ がん教育推進地域（岩国市）において教育講演会を開催（オンデマンド開催）

日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科教授 助友裕子 氏の御協力の下、岩国市内の教職員及び保護者、学校医等を対象として「学校におけるがん教育の効果的な指導方法—新学習指導要領の全面実施を見据えて—」と題して教育講演会をオンデマンド方式で実施。

○ 学校におけるがん教育研修会を開催（書面開催）

県養護教諭会、萩市教育委員会と共催で、NPO法人がんサポートかごしま理事長 三好綾 氏に講師を依頼し、県内の養護教諭を対象として、「がん教育を通して伝えたいこと」と題した研修会を書面開催で実施。

○ 実践事例集の作成

令和元年度、2年度の指導案や、文部科学省、県等が作成したがん教育に関する教材、指導参考資料などをまとめた実践事例集を作成し各学校に配布。

③ 保健部局や地域の専門機関等との連携

○ 県保健部局との連携

県健康福祉部医療政策課に、「がん教育推進協議会」の委員を依頼し、助言を得るとともに、県や国の動向についての情報提供や、外部講師の紹介など全面的な協力を得た。

○ 推進地域学校保健会（岩国市学校保健会）との連携

岩国市学校保健会と連携し、オンデマンド型の研修会を実施。

(2) モデル校における取組

○ 推進校（モデル校）

岩国市立平田小学校、岩国市立平田中学校、山口県立岩国高等学校

○ 公開授業（研究授業）

- ・ 10月21日（水） 岩国市立平田小学校（第6学年 学級活動 公開授業参加者数39名）

指導者 6年生担任、がん看護専門看護師

単元名 がんについて考えよう

主 眼 がんの原因やがん検診などについて知ることを通して、自分や大切な人のために、自分にできることを考える。

本時の流れ

- 1 がんに対する前時のイメージと、今の自分の考えとを比較する。
- 2 山口県のがんの検診率について知る。
- 3 地域の人にがんについて考えてもらうために、どのようなことを伝えればよいか、メッセージを考える。
- 4 話し合った内容を発表する。
- 5 外部講師のメッセージを聞き、学びを振り返る。



- ・ 10月29日（木） 山口県立岩国高等学校（第1学年 保健体育科 研究授業参加者数10名）

指導者 保健体育科教諭、山口県立大学准教授

単元名 現代社会と健康 ～生活習慣病とその予防～

主 眼 がんの現状を踏まえて、がん患者と共に生活するために必要な取り組みについて理解することができる。

がん患者との共生に必要な視点や考え方を知り、患者が暮らしやすい社会について考え、表現することができる。

本時の流れ

- 1 がんについて知る。
- 2 がん患者の生活の質について考える。
- 3 がん患者が暮らしやすい社会について考える。
- 4 本時の内容を振り返り、学習プリントに記入する。



- ・ 11月30日（月） 岩国市立平田中学校（第2学年 保健体育科 公開授業参加者数83名）

指導者 保健体育科教諭、がん看護専門看護師

単元名 健康な生活と疾病の予防 ～生活習慣病などの予防（がんの予防）～

主 眼 がんについての基本的な知識を習得し、それをもとに将来にわたってがんを予防し、健康な生活を送るための方策を主体的に考えようとすることができる。

本時の流れ

- 1 自分の現在や未来の健康について考える。
- 2 がんの現状について知る。
- 3 がんの原因について知る。
- 4 がんの早期発見・早期治療の重要性を理解する。
- 5 がんにかかるリスクを減らすために、何ができるか考える。
 - ・ 自分がどんなことに気をつけて生活するか。
 - ・ 大切な人にどんなアドバイスをするか。
- 6 本時の学習の振り返り、ワークシートに記入する。



○ 教育講演会

- ・ 11月30日（月） 岩国市立平田中学校

演 題 「がんを経験して」

講 師 急性骨髄性白血病経験者

現役フットサルプレイヤー 中平 雄介 氏

受講者 第2学年、公開授業参加者

＜講演の概要＞

中学2年生で急性骨髄性白血病を患われ、治療法に関してや、その当時の心境、病気を乗り越えて夢の実現についてなど、中平先生の体験を中心に講演していただいた。その後、生徒からの質問に答えていただいた。



（3）その他

○ 小中合同研修会の実施（岩国市立平田小学校・岩国市立平田中学校）

推進校でのがん教育の実施にあたり、県教育委員会から所管説明をした後、推進校（小学校・中学校）の公開授業での外部講師（がん看護専門看護師）による講義を行い、がん教育について教職員全体の資質の向上を行った。

2. 事業の達成度について

（1）協議会の評価について

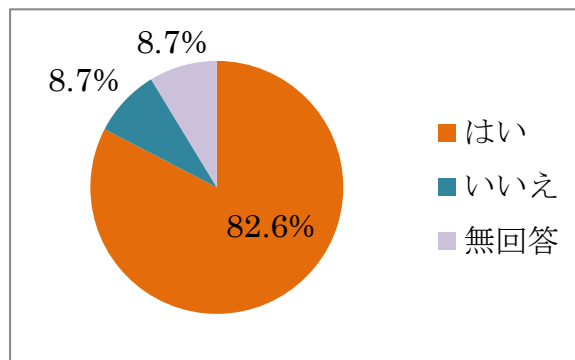
第2回協議会のアンケートで「協議会として十分な支援を行えたか」の質問に82.6%の方が「はい」と回答された。

「いいえ」と回答された方からは、「当初の予定がウェブ開催等で代替されたが、今年度は致し方ない」「委員への情報提供をお願いしたい」との意見をいただいた。

また、その他の意見として

- ・ 取組の充実を図るためには、教育委員会と首長部局（福祉部局）及び医療機関との連携が必要。
- ・ 児童生徒、その家族等への配慮が必要であり、特に命の大切さを考える際には、個々の気持ちを尊重する、児童生徒の感想から事後のフォローなど留意すべきことがあり、慎重に指導を行っていかなければならない。
- ・ がん教育は、健康と命の大切さを基盤とする自己管理能力の育成をめざした、連続性のある多様な学びの場ととらえている。しかし、学ぶにあたっては児童生徒の興味関心はさまざまであることから、養護教諭や保健体育科教諭だけの授業だけでなく、教科横断的視点による「横への広がり」の展開を考えてはどうか。
- ・ 平素の保健体育科の授業づくりではできない、高い専門性と患者さんと向き合われているご経験のある、がん看護専門看護師の先生にご指導いただくことにより、より質の高い授業づくりができる。県内のどの学校にも要請があれば、そうした方の派遣ができる体制づくりが必要だと思う。
- ・ がん教育のターゲットを教職員と児童生徒に限定することなく、保護者や地域住民等にも開いて、取組への理解・普及・啓発していく役割を果たしていただきたい。

といった、御意見をいただいた。



（2）児童生徒の事前・事後アンケート結果

アンケートの結果から、児童生徒はがんの学習は重要であり、健康な生活を送るために重要な学習であることの理解が進んでおり、がん検診を将来受診しようとする児童生徒が増えている。また、がん患者の生活の質やがん患者への理解と共生についての質問に対して、どちらの数値も向上しており、がん教育を通じて、がんに向き合う人々に対する共感的な理解を深め、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成につながっていると考えられる。

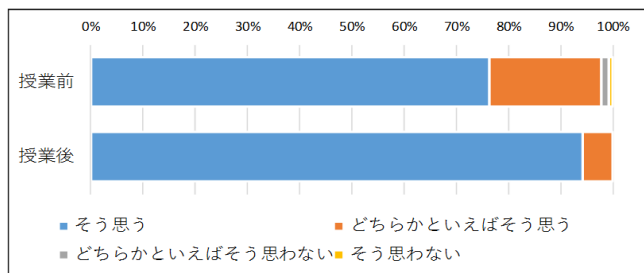
一方、がんと健康について家族と話をしようとする児童生徒も増えており、児童生徒を通じて、家庭への「がんについての理解の促進」も期待される。

アンケート結果（抜粋）

がんの学習について

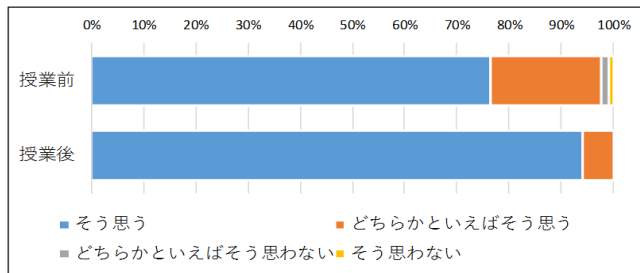
〈1-a〉

がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ。



〈1-b〉

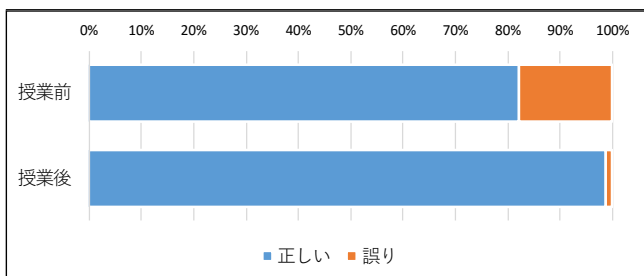
がんの学習は、健康な生活を送るために役に立つ。



がんについて当てはまるもの（意識）

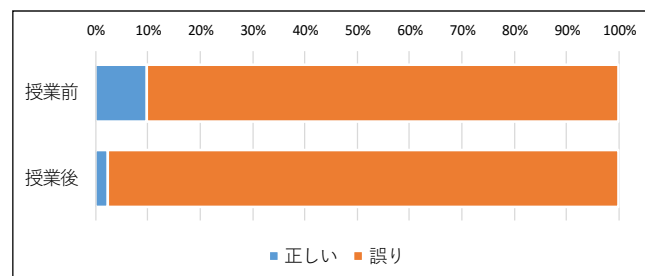
〈2-e〉

早期発見すれば、がんは治りやすい。



〈2-f〉

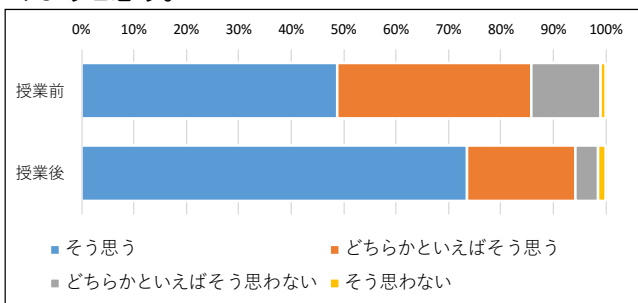
体の調子が良い場合は、定期的に検診を受けなくても良い。



がんについて当てはまるもの（知識）

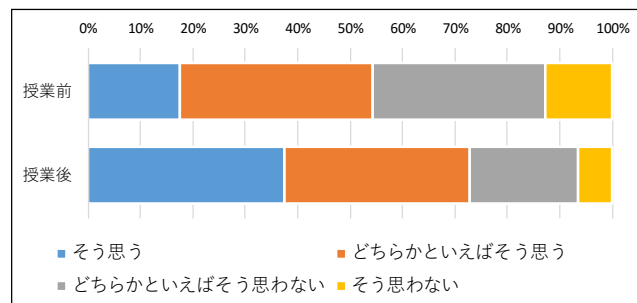
〈3-d〉

がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。



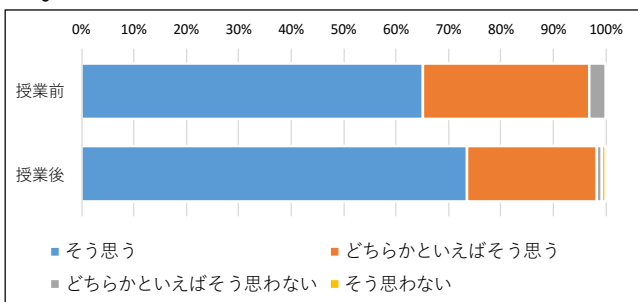
〈3-f〉

がんになっても生活の質を高めることができる。



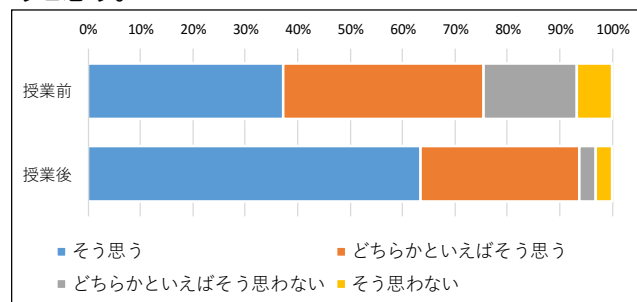
〈3-g〉

がんになっている人も過ごしやすい世の中にしたい。



〈3-h〉

がんと健康について、まずは身近な家族から語ろうと思う。



3. 今後の課題及びその取組の方向性（今回の事業により新たに見えた課題など）

○ 各学校におけるがん教育の推進を図る更なる授業開発

がんに関する基礎的な内容の学習で、知識重視になりがちな授業を、主体的・対話的で深い学びとなる授業づくりの実践が必要となる。また、教育内容を、一つの教科に留まらずに各教科横断的な相互の関係で捉え、効果的に編成することが重要である。

○ がん対策を担当する関係諸機関との連携の強化と外部講師の活用

外部講師のリスト拡大に関して、知事部局との連携を図りながら、拡充を図る必要がある。また、がん教育シンポジウムにおいて、がん経験者団体のシンポジストから、大学関係者、医療関係者はそれぞれの組織を通じて外部講師の依頼ができるが、がん経験者は外部講師として協力する意思があっても、どのような手順で協力できるか分からないという意見があった。がん教育に協力していただける方々に、本事業の公開授業や講演会などの周知をどのように行うか検討する必要がある。

○ 学校におけるがん教育推進のための研修会等の充実と普及

学校教育の取組を県内全域に普及させていくため、引き続き推進モデル地区を設けて公開授業や授業検討会、教育講演会を実施し、普及、推進に努めていく必要がある。

また、今年度同様、小・中・高の系統性を持った学びを実現するために、校種のバランスの取れた指定にも努めていく必要がある。

4. モデル校以外での取組について（課題や今後整理すべき事項など）

○ がん教育の継続的な実施

令和元年度の推進地域であった長門市では、令和2年度も市健康増進課の協力の下、市内の小学校・中学校においてがん教育について講師派遣を行っている。

継続的な実施を促すためにも、今後も推進地区の教育委員会だけでなく、健康増進部局や医師会等にも推進協議会や公開授業等に参加いただき、次年度以降のがん教育につながるように事業を行っていく。